

# 人 堯 の 禍 福 的 運 命

～ その一 ～

## Human Eternal Destiny

～ Part 1 ～

霧 島 怜

Rei S. Kirishima

### I . 神 仏 と 万 世 千 界 の 性 闡<sup>ひらき</sup>

#### 序 ～ 神仏信仰と人心の砂漠化

貧しい人々の中で一番貧しい人々、すなわち、皆に見捨てられてカルカッタ市の道端で死を待つ人々の救済と世話に一生を捧げた20世紀の聖女、マザー・テレサは、東京都で1981年の4月に行われた『生命の尊厳と家庭自然計画を考える国際会議』での講演の中でこう述べた。

『私は一体日本について何をしているというのでしょうか。私はこの国にパンに飢えている人々がいるかどうか知りません。皆さんの国は大変豊かな国だと思います。でも、妊娠中絶を許しているのなら貧しい国です。なぜなら、子どもを恐れているからです。…その子は死ななくてはならない。あなたが恐れているために。…ひとときのパンの飢え以外にも飢えがあります。愛の飢えもあります。大切にされず、愛されず、望まれず、必要とされていないと感じる人々もいます。私達は忙し過ぎるのです。私達はお互いに微笑みを交わす時間さえありません。一緒に祈る事となるとなるとおさらです。一緒にいて、お互いを必要とする事となるとなるとおさらなんです。…「裸」(の意味)とは、一つの着物でさえもないという(だけの)ことではありません。裸とは、私達が時として失ってしまった人間尊厳の自覚…これこそ現代人の「裸躬」<sup>ラキョウ</sup>である。裸躬・宿のない者とは、周囲によって除外され、誰にも望まれず、皆に見捨てられる事でもある。それは、男であろうと、女であろうと、子どもであろうと差はありません』。

さらに、1982年の4月に東京都で開催された『生命に関する国際シンポジウム』でマザー・テレサは人間の極貧・<sup>ごくひん せんびん</sup>賤貧の極地についてこう語った。

『母の胎内には、まだ生まれない小さな子、胎児が在ります。しかし、母親はこの子どもがほしくない。母親はこの子を脅威とみなします。(彼女はこう考えています：)もし私がもう一人の子を養わなければならないのなら、もう一台の自家用車を買う事ができませんし、カラーテレビも買えません。ですからその子を墮(殺)さなければならないのです。墮胎は殺人罪です。誰によって? 母親によって、医師によって。何と惨いことでしょう! あの小さい、無防備で無罪

の子ども。生まれてほしくない子ども。この心境はひどい貧困ではありませんか。それも、『愛の場であるはずの』家庭の真っ只中で。…ひときれのパンがない故に誰も死んでいない』<sup>(1)</sup>。

誠心誠意をもって全身全霊を挙げて神を愛し、自分と同じように隣人を愛する（愛神愛人）こと、又は、身心全力を挙げて仏法僧を敬い、衆生を慈んで生きる（見仏慈人）ことの教育が放棄され、撤廃され又は禁止されたことによって、善と悪、正しいことと間違っていること、真と偽り、誠実と裏切り、公正と搾取<sup>さくしゆ</sup>、真信と迷信<sup>まゐい</sup>、自由と勝手気まま、人権と私利私欲の盈満、自己自立と自己中心主義、社会貢献と営利追求、報道の自由と報道の無責任、社会福祉と重税による弱者の圧制、生命の尊厳と胎児殺害の合法化、自国独立の追求と少数民族の虐殺、人権とプライバシーの保護と犯罪者の保護、愛国精神の賞讃と戦犯の神格化〔神道で「神」という語は、物是神論的〈hylotheistic〉、汎神論的〈pantheistic〉、万有中有神論的〈panentheistic〉、万有中有霊論的〈animistic〉、単一神教的〈henotheistic〉や統（総又は全）一神教論的〈panapotheistic〉、即ち、多神多祇的〈八百万の神祇〉な意味で用いられている。それと違って、キリスト教で「神」という語は、神道の如く多種多義で多神多祇的な意味ではなく、無限無尽で絶妙極まりのない神聖と善美德を本然自内性としながら万世万有を永遠に隔越する唯一無二の存在者〈‘Deus’〉を意味するのである。仏教で「神」という語は万有中有神論的で多神多祇的な意味を有する。由って、「神」という語は、キリスト教、仏教と神道〈特に天皇制〉においてそもそも異なる意味で用いられている事を忘れてはならない。〕と崇拜、神仏と人間との違いとその認識が非常に薄れて来た。さらに、その結果として、精神力の弱衰、愛情の汚穢<sup>おわい</sup>、良心の歪曲や麻痺、真信と博愛の軽蔑、神仏の誹謗やその軽視の讃美、人間関係の機械化<sup>コンピューター</sup>（心が込められていない立て前・口先の関係）そして、人心の悶え・砂漠化と空白化（耐えられない孤独感）の時代が眼前に迫まっている。

この<sup>あわ</sup>愨れな現実の出発点と先駆者達は文化によって異なる。西洋では、ニーチェによる『神の死』と『超人誕生』の宣言である。東洋では、本居宣長による『現人神的天皇説』および明治憲法が制定し、後の勅令によって樹立された『天皇制』であると言わざるを得ない。

ニーチェ（Friedrich Wilhelm Nietzsche, A.D.1844-1900）はドイツのプロテスタント派牧師の息子として生まれ、ボン大学でプロテスタントの神学と古典文献学を修めた後、バーゼル大学の古典文献学の教授となった。『運命と歴史』という書物の中で、人類が今まで、キリスト教によってだまされ、「神の永存」・「人魂の不滅」・「キリストの贖罪<sup>しよく</sup>」と「万人救済」等の教えに惑わされていたと1862年に明示する。以後、1889年に気が狂乱するまで、神とキリスト教を相手に激闘し続けた。『悦ばしき知識』（Die fröhliche Wissenschaft, 1882年）という書物の中で、「神の死」（「おれたちが神を殺したのだ」）を宣言する。彼は、神様を本末とするキリスト教的な世界観、人間観、道徳、政治等の価値を否定し排斥したあげく、絶無主義（‘nihilism’）と神の座に着いた全能で最高の自由と権威を手に入れた『超人間』の時代の到来を夢見る。『悦ばしき知識』の「狂気の人間」という章の中で彼は、人類に、神の死を第一の悦ばしい知識としてこう告げている：

『諸君はあの狂気の人間のことを耳にしなかったか。白昼に提灯をつけながら市場へ駆けてきて、ひっきりなしに「おれは神を探している」と叫んだ人間のことを。「神さまが行方知れずになったというのか」とある者は言った。彼は叫んだ「おれたちが神を殺したのだ」…こうした所業の偉大さはおれたちの手にあまるものではないのか。それをやるだけの資格があるとされるに

は、おれたち自身が神々とならなければならぬのではないか。これよりも偉大な所業は、いまだかつてなかった。そして、おれたちのあとに生まれてくるかぎりの者たちは、この所業のおかげで、これまであったどんな歴史よりも一段と高い歴史に踏み込むのだ』と。

ニーチェの思想について執筆した宮城教育大学の船橋弘氏はこう述べている。『ここには、神の死というニヒルな現実を直視し、この運命をみずから担うことによって、より高貴な人生を切りひらこうとする決意が表明されている。人間は、みずから自由になるためには、神を殺さねばならぬのである。こうして、ニーチェの最後の立場が展開してくる』。そして、この最後の立場というのは、「神を殺した」ニーチェは、神座に『超人間』(神より偉大な人間)を着かせ、「何をなすべき」ではなく、「我れは欲する」ということを生き方の原理として自由で恣ほしままに生きるという結論であった<sup>(2)</sup>。

次に日本人が作り上げた『天皇制』のことである。日本の歴史の中で、様々な宗教と国家体制と共存していた「伝統的な神国思想」と国学者が提案し、皇政実力者が作成し、その支持者が法制化した「近代天皇制」(『国家神道』と呼ばれるもの)を大別しなければならない。日本古来の宗教である神道とその根本哲理(特に、宇宙開闢・神祇の発現・国土の創造・天照大御神の位と天孫降臨の象徴的～神話的な説明)を土台とした伝統的な神国思想は、日本とその支配者の特別な地位を主張するにはするが、皇室を中心とした政権は、部族差別、人種の差別や優劣を打ち出すことがなければ、国家体制をあげて儒教や仏教を迫害したり根絶しようとしたりすることもなく(却って、仏教等を支持していた皇帝達が多かった)、明治維新まで王制と異なる国家機構と共存し、日本の内外にもその思想を強制したこともないという事実を忘れてはならない。

北畠親房(A.D.1293-1354)は『神皇正統記』の中でこう述べている：

『大日本は神国である。国常立尊が初めて国の基礎を開かれ、天照大神よりあと長くそのシンくにのとこたちのみことンが系の皇統を伝えられてきた。日本の国にのみ、このことがある。他国には、このようなことはない。これゆえに、神国というのである』。

さらに貝原益軒えきけん(A.D.1630-1714)は『神祇訓』の中でこう記する：

『日本の国は、その始めより神が出現され、神の統治されてきた国であるから、昔からこの国のことを名づけて「神国」といつている。それは外国でいうと、中国を聖人国と称するのと同じようなものである』<sup>(3)</sup>。

仏教とキリスト教を暴憎し、唯一神教の価値観を公私的な生活の軸とした欧米文化に対して強い劣等感を抱いていた国学者と明治・大正や昭和時代の権力者は、古代日本の神話、特に『国生み神話』と『天孫降臨神話』の地理的、宗教的と哲学的な象徴性を誤解し、文字通りに解釈した。よって、一切世界に先立って存在していた伊耶那岐神と伊耶那美神や国之常立神が日本の国土のみを造り、部族によって宇宙万有の最高支配者として見なされた高御産靈神、神産靈神や天照大御神を歴代皇帝の祖神とした。更に、全宇宙最高神の直結血嗣とされた皇帝に絶対不可侵の権威と権限を与え、こうした天皇を祭政最高者、国家体制の元首と国民の全生活を司る生き神に作り上げた。国学者の一人、本居宣長(A.D.1730-1801)は『直毘靈』なおびのみたまという著作の中でこう述べている：

『天皇が統治されるこの国は、ことばに出していうのもおそれ多いが、神の祖天照大御神がお生まれになった立派な国であり、その天照大御神が、その御手に天神の子孫のみしるしである三種の神器を捧げもたれて…この国は、いついつまでも、私の子孫が統治される国であるとおまかせになられたとおりに、雲のはるか向こうの地の果てまで、また、ひきがえるの歩きまわる果てまで、そのご子孫が統治される国と定まってよりの方、天下にそれを妨げる荒々しい神もなく、またそれに従わぬ人もなく、いついつまでも、歴代の天皇は天照大御神の子孫として、天つ神のみこころを自分自身のみこころとされて、神代の昔もいまの世の中もかわりなく、そのとおりにして神代そのままの泰平な国として、平安に統治されてきた御国である。…天照大御神が統治のことをまかせられたとおりに、天下のことは、そのご子孫の天皇が統治されていて、その万世一系の皇位は天地の続くかぎり、永遠にゆるぐようなことはないのである。それこそ神道が奥く深く貴く、他国のすべての道に比べすぐれていて、正しく、高く、貴い道である証拠である。そもそも、この神道とは…天地のあいだに自然にできた道ではない。また人間が考えつくり出した道ではない。この道は、おそれ多くも高御産巢日神のみこころをうけて、伊耶那岐大神・伊耶那美大神が始められ、天照大神が受けつがれて、教え伝えられてきた道である。…世間の知識人の心も、みな禍津日神の心にまじり、こり固まっていて、ひたすらに中国の書に迷っておりその思想も、またその表現も、みな仏教、儒教の思想であり、真の日本の神道の心を、よく悟らないでいる。…ああ、おそれ多いことである。天皇が天下を統治される道を、下人民が勝手に私的な道とすると。…昔の聖代には、下々の人々まで、ただ天皇のみこころを学び、まねをして自分のところとし、ただひとすじに天皇のおおせごとをかしこみ尊敬し、敬服して、その天皇のご慈愛のもとで、各自、祖先の神をまつりつつ、…平穩に楽しく世の中に処する』<sup>(4)</sup>。

昔からの神道が培って来た「日本神国思想」と『天皇神嗣観』、さらに、国学者が切り開いた『現人神的天皇観』、『皇統の万世一系観』および『日本優越観』を基に、明治維新より太平洋戦争の終結まで、歴代天皇をはじめ、その皇政の実力者は『天皇制』（事実上で「天皇崇拜教」）を大日本帝国憲法等の規定として法制化し、国家の全機関を挙げて、国の内外に徹底していた。先ず、神道以外の宗教（の自由が憲法上で保証されたにも拘らず）、特にキリスト教の根絶に全力をあげ、天皇を地上で唯一無比の『神聖ニシテ侵スベカラズ』（憲法第1章第3条）の存在とし、国家の元首という大権が与えられ、皇室も神聖視されることになった。さらに、日本国土のみが神々によって創造され、万神万有の支配神の子孫によって統治されている日本のみは、「神国」でありながら、世界中の国々の内に匹儔なき国であり神聖な国民（国家優劣主義と人種優劣主義）であると見なされていた。天皇も又、人間を隔絶する全世界の最高統治者と見なされ、日本人が天皇のためお国のため、そして万国万民が天皇とその神国民のために尽すべきとされていた<sup>(5)</sup>。さらに、遺憾なことに、明治時代から太平洋戦争の終結まで国歌として定められていた『君が代』という歌、過去の侵略被害から生ずる隣国民の痛烈な懸念を無視し、国民にも相談しないまま2000年に再び日本国歌として法制化され強制されている。この歌詩は、国民の隆盛と平和、万民の連帯感や福祉繁栄を念ずるものでなければ、神仏による国民や全人類の加護を祈るのでもなく、天皇だけの裕福とその統治の悠久性を称えるのである。

今度は、一転して、ニーチェ達のような虚無主義と超人主義の『神仏誹謗』や天皇制のような排他主義と陰湿的な人間差別主義ではなく、2600年の歴史を有し、万代万人に生きる道を示して来た釈迦牟尼の「見仏慈人」の教えと、2000年の歴史を持ち、万国万民に希望を示して来たキリストの『愛神

愛人』の教えの一端を紹介する。東洋では釈尊、西洋ではキリストと肩並べる者がいない。彼らの精神力量、心眼、教理の深奥と利他（済度）的な活動が人類の文化、特に人心の形成に与えて来た影響に測り知れないものがある。彼らの言行一致、誠心誠意、慈愛と心身不惜の生き方に憧れている者が今もあとを断たない。

世尊が、涅槃経の中で、一切をして一切を超脱している仏様（如来、如来蔵、仏性、法性）のことをこう詮している：

『如来の身は広大無量だと見るもの、微少だと見るもの、仏は声聞の像と見るもの、独覚の像と見るもの、外道の像と見るものなど様々である。…しかし、如来の実性はかの月と同じであって、法身であり、無生身である。そして方便身が世に随順して、無量の業により所々に生をうけるということを示現する。その事情はあたかもかの月と同じである。かようなわけで、如来は常住であり変異することがないというのである。…（世尊は）如来の微妙秘密の本質を説くものである。…善男子善女人らは、如来は常住にして変易あることなく、正法は不断であり、僧宝も不滅であることを思わねばならぬ』〔pp.991-992〕。

そして、勝鬘しょうまん経の中で、勝鬘夫人は、世尊の許可を得て、彼が彼女に説いた如来蔵《仏性》の教えを丁寧に繰り返しながらこう確認している：

『世尊、死というのも生というのも、それは、世間の言い慣わしであり、世間的なことをごさいます。世尊、死というのは緒根の滅することであり、生というのは新たな緒根の生れることをごさいます。ところが世尊、如来蔵には、生れ、老い、死ぬということも、死して生れるということもごさいません。世尊、如来蔵は、有為転変のあり方を越えているのでごさいます。世尊、如来蔵は、常住不変であり、堅固であり、不動をごさいます。世尊、そのごとくでありますから、如来蔵は、煩惱と別なものとして存在せず、しかも如来より離れていないことのために、煩惱の束縛より開放されていると認識される無為眞実の諸存在にとっての所依であり、支柱であり、基礎をごさいます。世尊、同じくまた、如来蔵は、本来的に煩惱より離れているのにしかも如来と別なものとして存在していることのために、煩惱の束縛より開放されていないと確認される有為転変の諸存在にとっての所依であり、支柱であり、基礎をごさいます。世尊、もし如来蔵がないならば、苦しみを厭い、涅槃を求め望み願うということもないであります。…世尊、この如来蔵は、正法が生れ出る根源をごさいます。如来の法身の根源をごさいます。世間的なあり方を越えた眞実の法の根源をごさいます。本来的に清浄であり、空である諸法の根源をごさいます。世尊、如来蔵は、本来的に清浄・空であるのに、しかも偶来的な煩惱によって汚されていることをごさいます。言い換えますと、如来蔵は、如来の法身が煩惱の纏いからいまだ脱却していない状態のことをごさいます。このことは、如来だけの理解されるところをごさいます。全く不可思議と申すほかはごさいません』〔pp.1123-1125〕。

次に、阿含經典の中で、世尊が説けなかった（万代万人の根本的な）事柄とその理由について、彼自身がこう説明している：

『マールンキヤーブッタよ、それでは私によって説かれなかったこととは何であるか。マールンキヤーブッタよ、「世界は永遠なるものである」とは、私によって説かれなかったし、「世界は永遠ならざるものである」とは、私によって説かれなかったし、「世界は有限なるものである」とは、私によって説かれなかったし、「世界は有限ならざるものである」とは、私によって説かれなかった。「生命と肉体とは同一のものである」とは、私によって説かれなかったし、「生命と肉体とは異なるものである」とは、私によって説かれなかったし、「人は死後にも存在する」とは、私によって説かれなかったし、「人は死後に存在しない」とは、私によって説かれなかったし、「人は死後にも存在し、かつまた存在しない」とは、私によって説かれなかったし、「人は死後にも存在するのでもなく、存在しないのでもない」とは、私によって説かれなかったのである。マールンキヤーブッタよ、しからは、何故にそのことが私によって説かれなかったのであるか。マールンキヤーブッタよ、そのことは利益を伴うものではなく、清らかな修行の基礎となるのでもなく、世俗的なものを厭い離れること・欲望から離れること・煩惱を止滅すること・心の寂靜・すぐれた智慧・正しい覚り・涅槃のために役立つからである。それ故に、私によってそれが説かれなかったのである（「これは苦・苦の原因・苦の止滅・苦の止滅に至る道である」とは、私によって説かれたものである。マールンキヤーブッタよ、その事は実に、利益を伴うものであり、清らかな修行の基礎となるのものであり、世俗的なものを厭い離れること・欲望から離れること・煩惱を止滅すること・心の寂靜・すぐれた智慧・正しい覚り・涅槃のために役立つからである。それ故に、私によってそれが説かれたのである）』。〔pp.189-191〕。《にも拘らず、後世の仏教の聖哲達が、世尊の教え（例えば、輪廻転生）を元にして、「世界の永遠性等」の事柄について論説している》。

さらに、阿含經典は、世尊が詮いておられた人筈の禍福とその道心（この世で、「楽しい生き方を探し求めるのと、自己の真福を探し求めるのと、いずれが勝れているか」という問い）についてこう伝えている：

『ベナレスから出てウルヴェラの密林の中へ入って或る樹木の根元に坐っておられた。ちょうどその時、30人の賢人が夫人を伴ってそこで遊び楽しむ為に来たが、一人には夫人がいなかったので、彼は遊女を連れて来ていた。彼らが放逸に遊び楽しんでいる内に、その遊女が品物を持ち去って逃げてしまいました。そこで友人達は、彼を助けてその女を探し求め、密林をさ迷っていた時に、世尊が坐っていた所まで近づいて、次のように言った。

「尊いお方、世尊は一人の女をご覧になったのでしょうか」。

「若者たちよ、その一人の女をどうしようと言うのだ」。

「尊いお方、…（そして、彼らが起こった事を世尊に話した）」。

「若者たちよ、お前達はどうか考えますか、お前達が遊女を探し求めるのと、自己を探し求めるのと、お前達にとっていずれか勝れていますか」。

「尊いお方、我々にとっては、自己を求めるそのことこそ、勝れております」。

「お前達若者よ、それでは坐れ。私はお前達のために教えを説こう」。

「尊いお方、はい、どうぞそのように」。

と言って、世尊に敬しく礼をして一方の隅に坐った。世尊は、彼らのために（順序次第にしたがっ

た訓話)を説かれた。すなわち、布施の話、戒めの話、天界に生れる話、諸々の欲望は禍患あること・下劣で汚れていること・および迷いから出離することの利益とを説かれた。世尊は、かれらが健全な心・柔和な心・偏見に執らわれない心・歓喜の心・澄み切った心を備えたのを知り、諸仏が讃めたたえた最勝の教説を説かれた。すなわち、苦しみと、苦しみの原因と、苦しみの止滅と、苦しみの止滅に至る道(という四つの真理)である』。[pp.93-94]

さらに、別の機会に、世尊は万人万職の平等についてこう述べた：

『(人は)生まれによって賤しい人となるのではない。生まれによってバラモンとなるのではない。行為によって賤しい人ともなり、行為によってバラモンともなる』。[pp.270-271]<sup>(6)</sup>

メソポタミア、特に、ユダヤの宗教的な世界観の一部を継承しているキリスト教の聖典(旧約聖書)は、神様、宇宙万有と人間との相互関係を次のように記している：

『神は天と地をつくられた、それが始まりであった。地は整わず、むなしく、闇が底知れぬ淵を覆い、水の上に神の息吹が舞っていた。神が「光あれ」と仰せられた。すると光ができた。神は光をよしと思われた。光と闇を分けられた。神は光を昼と呼び、闇を夜と呼ばれた。…神様はさまざまな種類の野の獣と、家畜と、地に這うものをつくり、これを眺めて、よしと思われた。ここで、神様は、こう仰せられた、「われらに似せて、われらにかたどって、人間をつくろう。そして、海の魚と、天の鳥と、家畜と、野の獣と、地にはうもの全てを、これにつかきどらせよう」と。神はご自分にかたどって、人間をつくりだされた。人間を神のかたどりとし、男と女につくりだされた。神は、人間を祝福して仰せられた、「生めよ、増えよ、地に満ちて、地を支配せよ。海の魚と、空の鳥と、家畜と、地を這う生き物をつかきどれ』。[旧約編, pp.5-6, 創世記, 1.1-28]

キリストは、ファリサイ派のニコデモ議員との対話中、神様が宇宙万物を愛しているという事についてこう語る：

『神は御独り子を与えたもうほどこの世を愛された。それは、彼を信じる人々がみな滅びることなく永遠の命を受けるためである。神が御子を世に送られたのは、世を裁くためではなく、世を救うためである。御子を信じる人は裁かれぬが、信じぬ者は、神は御独り子の名を信じなかったがため、すでに裁かれている。審判と言うのは次のようなことである。光は世に来たが、人々はその悪い行いのために、光よりも闇を好んだ。悪を行う人は光を憎み、その行いが現れることを恐れて光の方に来ないが、真理を行う人は、神によってそのことを行われていることを現わすために光のほうに来る』。[新約編, pp.139, ヨハネ, 3. 16-21]

別の際に、時の成就、世の終わりと自分の再来に伴う混乱についてキリストはこう述べた：

『日と月と星にしるしが現れ、地上では国々の民は悩み、海と大波のとどろきに恐怖する。人々はこの世界に起こることを思い、恐怖と不安のうちに死ぬであろう、天の力が震い動くからであ

る。その時人々は、人の子が勢力と大いなる栄光をおびて雲に乗り下るのを見るであろう。こういうことが起こり始めたら、身を立てて頭をあげよう、あなたたちの救いが近づいたのだから…』。

〔新約編, pp.125, ルカ, 21. 25-28〕

『その時、「そらキリストがここにいる」、「そらあそこに」と言う者がいても信じてはならぬ。偽キリストや偽預言者が起こり、しるしや不思議をおこない、できれば選ばれた者さえ惑わそうとするであろう。気をつけよう。あらかじめ私はこれらのことをあなたたちに言うておく。その日の苦難の後で、日はくらみ、月は光を失い、星は空から落ち、天は揺れ動き、人の子が大いなる勢力と大いなる栄光をおびて雲に乗り下るのを見るであろう。その時彼は天使達を送り、地の果てから天の果てまで地の四方から選ばれた人々を集める。…その日その時を知る者は一人もない。天にいる使いも子も知らぬ。父だけ知りたもう。注意して警戒していることだ』。〔新約編, pp.74, マルコ, 13. 21-33. 参照, マタイ, 24. 23-36〕<sup>(7)</sup>。

神仏が本当にいるのかいないのか？ 人間が人間らしい幸せを得るためには、神仏信仰を本当に根絶しなければならぬのか。神様や仏様とは一体どんな存在なのか。ニーチェとレーニンが正しいのか、それともキリストやマザー・テレサの方が正しいのか。本居宣長と天皇制が正しいのか、それとも釈尊と親鸞の方が正しいのか。さらに、神仏と人間・神仏と万我物事象そして神仏と一切の世界とはお互いに関わっているのか関わっていないのか。関わっているとすれば、それはどんな関わり方であるのか。

以下、世尊と彼に倣って生きていた数え切れない信奉者の心、その教えと生き方（生死解脱の道）に憧れ、自他人堯<sup>(8)</sup>の歓迎、人堯解脱の探求、その弘布と徹底化に一生を尽した道元禅師（A.D.1200-1253）の身心脱落（身と心の現世的で凡俗的な私利私欲と自己中心的な生き方等を脱ぎ捨てること）、身心辨道（無限で絶妙の極まりない御命の道を我が道とし、一切の生死とその苦楽を通じて、全身全霊を尽し、仏道を喜んで学び行うこと）と諸仏諸祖の大悟に通ずる心眼（過去聖哲の悟りに通ずる精神的な閃めき）の実りを、これからの一連の撰著と様々な問題解釈の拠<sup>よりどころ</sup>と導<sup>しるべ</sup>とする。さらに、キリストと彼に従って生きていた数え切れない信奉者の心、その教えと生き方（愛神愛人の道）に憧れ、自他人堯の歓迎とその尊敬、人生各段において神旨を追求し、その公布と理解に生涯を捧げた聖トマス・アクィナス（A.D.1225-1274）の『神愛観想』（神の徳力、その栄光と万物への愛の業を究尽しながら生きること）と万代万人の使命の洞察の実りを、これからの撰著と諸問題考察のも一つの拠所とするべとする。伝によると、トマスが臨終の時に『私は夜を徹して眼覚め、疲れ果てるまで働いた。それはすべてあなたを愛するためであった』<sup>(9)</sup>と神様に祈ったそうです。道元もトマス・アクィナスも、神や仏と称ぜられる御命、宇宙万有、人間とそれらの相互関係の把握と正しい理解が幸せな人堯を歩むために非常に重要で不可欠であると強調していた。この二人を人間の一大事（生きる意味と人堯慶福の成就）に関する一連の論考の拠所と權威に選んだ理由が次の通りである。人類の歴史において、誠心誠意をもって神仏・梵や天命（永遠で無限の命）の真理および人堯の真理を追求しながらそれを模範的に生きていた聖哲が多いが、釈尊とキリストに続いて、この一千年間で日本では道元禅師と西洋では聖トマスほど真面目で全身全霊を挙げて生涯を通じて永遠の真理を追求し、人堯の歓迎とその幸福に貢献した者は見当たらない。一番弱く、自分を守ることの出来ない人々の血と汗の重税で飲食し、遊びながら自分の財産を増している帝王達、政経医療の実力者やいわゆる新興宗教の教祖達と違って、この二人は、万代万人・男女万職が「仏の子ら」であり「神の子ら」であるので、平等



で公正に人間に相応しい幸せを得るために力を合わせて協力し、仏を敬い人を慈しみ、神を何より愛しながら他人を自分のように愛すべきであると教え、その価値を社会に示した。そして、文化、宗教とその表現の違いにも拘らず、この二人の教・行・信と証は、今も、素直な心をもって生き、「人堯の幸せ」を真面目に考えている人々に感動と刺激を与え続けるのである。更に、現代社会の諸相諸面を蝕んでいる無防備な生命の殺害、弱者の冷酷な搾取、自己中心的な栄利の追求とその神聖化、偽善と無信の讃美、愛の汚染、人知と科学の悪用、精神力の麻痺と人心の砂漠化などのような現状からの脱出の手掛りとその方法をこの二人の聖哲が明示していると思う。

さて、あらゆる状況に置かれて生きる、あらゆる人々の救済に全力を尽した釈尊とキリストの心（特にその無量で無辺の正覚<sup>ケイジ</sup>）と言行の一致に惚れた道元とトマス・アクィナスの大閃<sup>ひらめき</sup>を背景に、これから数回に亘って『人堯の禍福的運命』（人間的な生命に禍福的な性闡<sup>ひらき</sup>とその実現の道があること）を説述する。

人堯の道とその禍福を考える際、人間的な環境範囲内の道とその幸不幸を考えるだけではなく、宇宙万有とその究極的で本末的な親である神・仏（無限で絶美極まりのない御いのち）との関係をも視野に入れて初めて、「人堯の道とその性闡」の全貌が見えて来ると道元やトマス・アクィナスだけではなく、万代万人の聖哲<sup>(10)</sup>は強調する立場である。先ず、この撰著の中で、道元の大作である『正法眼蔵』とトマス・アクィナスの大作である『神学大全』を拠とし、人堯の生々世々（今生も来生も一切の生を通して）の道とその禍福的な闡きの本末であり、基盤であって保証である『神仏と人間の関係』について提唱する。

第一章の中で、道元禪師が詮いた無限無尽の御命である仏様の性質とその根本徳力、万世千界とその我物事象の道および仏様と宇宙万有の相互関係を独自の把え方をもって示す。

第二章では、天使的博士と称ぜられるトマス・アクィナスが詮いた神様とその根本徳力、宇宙万有の性質とその道および神様と宇宙万有の関係を独自の表現をもって説示する。

## 1. 仏と万世千界の性闡

### (1) 仏と万世千界の道を詮く

日本の精神（心）が生んだ最高の傑作 — 『正法眼蔵』 — の中に道元禪師が『仏』（絶対的御命）という世界の<sup>実存</sup>を直接に立証する文脈が見当たらない。しかし、『仏』の実在性、現実性、在り方とその徳力を様々な面から功みに論説しながら描写しているので、心眼をもって坐禅むならば、『仏』の実存が十分に裏付けられていると悟<sup>わ</sup>かる。この『心眼』というのは、真理と偽り、善と悪、誠と騙し、悟りと迷いなどを識別せず、何をしてもどんな立場を取っても相手を咎めずやさしく扱い、感情的で情緒の動きに敏感に反応し、相手の心奥を読み取る鋭い靈感力を具えている人の力量を意味するのではない。ここで言う『心眼』とは、仏眼、天眼、正法眼や無上正覚眼のことであり、一切の世界とその現実を在りのま<sup>ま</sup>に把握し是認する人我・人魂の力量とそのはたらきである。従って、この眼識は、ありとあらゆる宇宙の万有万象を諸科学の見地から洞察する「八万四千の眼」でありながら、一切の対立や反対、相違や待対と差別差異の根底に横たわり、あらゆる世界とその万我物事象を通<sup>そ</sup>しながら隅々まで沁（浸）徹する共通で何もの何ごとにも礙げられない普遍の存在力・生命力（「空」

とも、「無〔限無尽〕」とも、「仏性」とも、「無量無碍光如来」とも、「大日如来」とも称ぜられるなにかが恚ひら麼)に気づく人間精神の閃めきである。しかし、それだけではない！ この悟眼は、先ほど言及した多様な検眼によって把えられた多種多様な現実の世界と無礙透徹の眼によって捉えられた泌徹的、遍在的で卓越（超絶）的な「一」・「一心」・「単一太極」の世界がお互いを排他しなければ矛盾もしない、対立する面々があっても共立と通和する面々もあり、独立の層々があれば依立する層々もあり、単一の次元があれば複合する次元もあり、単独の面があれば共同の面もあり、特有の層があれば普遍の層もあり、同時同所において切り離せない「多面一体」・「多相一心」や「多元一如」という不可思議な生命界・生命体みを成している事をみ瞻破り通徹する人我の内眼である。しかし、この内眼は、血縁を通じて遺伝する能力でなければ、人種・民族・階級・派閥や地位の特権でもないし、大金を投じて塾等で英才教育を授け、富貴で得る事がなければ、根回し等で手に入れることが出来た者は一人もいない。この眼は、見仏慈人・愛神愛人や敬天仁人の心を自からの道とし、謙虚で誠心を込めて坐禅しながら辨道修証（教行信証に心身を投じること）し、又は、ひざまず跪いのりいて瞑想しながら実生活において聖道を実行（真の教と信の瞑想を日々に行うこと・日々の修証は大悟の具体化・contemplativus in actione）することによって心の清い人のみが得られる玄通眼・正法眼（現実諸相の在りのままをみやぶる眼力）である。

「正法眼蔵」の中で展開されている宇宙観には、一切世界の万我物事象とその徳力、それらを裏打ちしている単一的な御命（仏様）とそれらの相互関係の実在性、現実性と在り様が是認され、様々な側面から精妙に詳解され論述されている。先ず、心の視聴覚を澄まして、禪師がと詮く宇宙観の主旨を味わおう。

「仏性」巻には大般涅槃經を引用してこう語る：

『一切衆生、悉有仏性。如来常住，無有變易』。この語句をこう解釈する。『一切の世界とその万我物事象は真に生きている・実存しているものであり、悉くが実存する仏性・御命の活現成である。如来・御命は永遠を通じて存在し、無限無尽であり、有限個々として活現し、変易する世界である』<sup>(11)</sup>。

「三界唯心」巻の中でりょうが楞伽經の句を引用した後、道元はこの語句を解釈しながらこう述べている：

『三界唯一心，心外無別法。心仏及衆生，是三無差別』。…三界はすなはち心しんといふにあらず。そのゆゑは、三界はいく玲瓏八面も、なほ三界なり。三界にあらざらんと誤錯ごうしゃくすといふとも、総不著なり。内外中間，初中後際，みな三界なり。三界は三界の所見のごとし。三界にあらざるものの所見は、三界を見不正なり。…釈迦大師道，「今此三界，皆是我有，其中衆生，悉是吾子」。…我有は尽十方界眞実人体なり，尽十方界沙門一隻眼なり。衆生は尽十方界眞実体なり，一一集生なるゆゑに衆生なり。悉是吾子は，子也全機現の道理なり。しかあれども，吾子かならず身体髮膚を慈父にうけて，毀破せず，虧闕せざるを，子現成とす』。

この文脈を現代語に直すところ読む事が出来る：

『在りとあらゆる三界（過去・現在と未来の欲界・色界と無色界）は唯一心の活現成であって、「仏性」たるこの御心の活現範囲から外れたり、別れたりする我・物・事・象が一つもない。この心は、無上正覚者として、祖師達として、さらにその他の我物事象として活現成することによって当然、唯一心、諸仏諸祖と一切の我物事象の自然性質において共通の次元がある。…この三界の万有千化は「唯一心」の全現実を尽しているという意味（の事を主張するの）ではない。それゆえに、三界の万我物事象の全面全相はそのままに無上で無限の輝きを有する玲瓏の宝珠（仏命）の光明であって、仏光の輝きでない我物事象が一つもない。例え、そうでないと誤って観る者があっても、三界の全てがそうであり、この光明から離れ得る存在が一つもない。三世万界の我物事象の内側・外側や空間をとって見ても、又、各々の世界、我、物、事や現象の生成化育や進退の段階を把って見ても、総てが仏命の光明界内の世界に過ぎない。三世万界を仏光の三界と捉えなければ、宇宙万有とその在り様を正しく理解出来ない。…世尊は、「今のこの三界とその全相全態は無限無尽でどんな物事にも礙げられ得ない御命たる「仏」の所有する世界であって、その中に生きとし生ける万我物の一つ一つも仏の子どもである」と言われた。…我有とは、在りとあらゆる世界（尽十方界）に実存する万我物事象（を「眞実人の体」即ち、絶対の眞実であって絶美の極まりない妙格を本然自性とする仏の生身として把えるの）であって、在りとあらゆる修証（行）者とそのきと悟閃の世界である。衆生とは、在りとあらゆる世界に実存する万有千化とそのあり様であって、一瞬一塵も眞に存在する仏の生身の一現である。万我物事象の一つ一つは絶対の御命の一相一現であるので「生きるもの」である。「万我物事象の悉くは仏の生子である」という世尊の語が担っている意味は、「仏の子らたる万我物事象の全身心は、絶対の生命である仏の絶え間なき活現成である」という道理である。子としての我物事象の各々の身も心もこの上ない慈親である仏からひんじゆ稟授されたものであるので、それを傷つけたり破壊したりしてはならない。仏の子の心身に損傷を与えないことこそは、子としての我物事象の眞面目の成就であり自己実現である』<sup>(12)</sup>。

『諸法実相』巻の中で道元は、仏、万有千化とその性質・徳力・形態・相体用と因果縁起およびそれらの相互関係を次のように詳解する。

『釈迦牟尼仏のことばに、「ただ仏と仏のみが諸法の実相（眞理）の現成であることをよく究め尽くす（体験する）のである。諸法とは眞理としての相、眞理としての性、眞理としての体（本体）、眞理としての力、眞理としての作（働き）、眞理としての因、眞理としての縁、眞理としての結果、眞理としての報い、眞理としての本末究竟等（本の相から末の報いまで各が事理を究めていること）である」と。この十の眞理そのものの現成である。これを釈尊は「十如是」と示されたのである。…諸法の眞実の相が仏と一体となるばかりでなく、諸法の眞実の相は衆生の一人一人そのものである。…仏と衆生と諸法実相は一体であることが仏道の参学である。…唯仏は実相である。与仏は諸法であるというべきである。…諸法は形体や量や数の上での差別の相であると参学してはならない。実相は虚とか実とかを越えたところをいうのであり、諸法は無〔定〕性を自性というのであるから、性でないと参学してはならない〔道元の原文では、「実相の道を聞取して、虚にあらずと学し、性にあらずと学すべからず」と示されている]<sup>(13)</sup>。実（無〔定〕性という自性）は、無を実と見ることのできるのは唯仏であり、相（実の相）は仏の働きで確めら

れるのである。…諸法はそのままを唯仏とし、実相は万法の偽らない相であり、その相は唯仏の現われであるから実相は与相である。…一切の現象は仏の現われであり、宇宙全てが仏の国土であって一法といっても仏でないものはない。又諸法は唯仏清浄の身であって、実なるものである。…乃能（仏）と究尽（仏の境地）とは、つまり一つのものである。乃能究尽是諸法実相であり、諸法実相は十如はそのものである。その乃能究尽には乃能が先で究尽是後であるということはないから、共に真理としての相、性、体、力等である。…諸法実相は真理としての相であるが真理の相は無相〔無限相、妙相、無定相、超微相〕<sup>(14)</sup>である。この故に相は真理としての性を究尽して性と相とは二つでない。真理としての性は真理としての体を究尽して二つではない。真理としての体は真理としての力を究尽して二つではない。真理としての力は、真理としての働きを…真理としての働きは、真理としての因を…真理としての因は、真理としての縁を…真理としての縁は、真理としての果を…真理としての果は、真理としての報いを…真理としての報いは、真理としての相、即ち本の初発心より末の証果の果報まで各究尽して全て平等である。本も究竟、末も究竟の道理は、諸法実相の現成として真理なのである。…あらゆるものごとの相、性、体、力等は無量無辺に実相である。又この果は相、性、体、力等と一つでなく<sup>(15)</sup>、各独立のものである故に、即ち、あらゆるものごとの相、性、体、力等は各真理である。…真理の相は一つの相ではない。真理の相は一つの真理のみをいわない。無量無辺であり、言葉では表現できない真理である。…唯仏と仏は能く真理の相を究尽すれば性を具しており、体は性を具して全て、体と力、力と作、作と因等とついてまわって、真理の相は無量無辺で筆舌に尽くし難い働きを持っているのである。このような道理であるから、全宇宙の仏国土は、唯仏と〔与〕仏のみで仏以外は何もない。…圓悟禪師が言われた。「生死の去来は眞実の仏心（真理）である」〔道元の文では、「生死去来、眞実人体」とあって、私は、これを「生も死も、過去も未来も、現在も勿論、絶対生命を絶妙極まりのない本然の自性とすの仏の眞の現成身である」と訳す〕。長沙景岑禪師が言われた。「全宇宙は仏身である。全宇宙は仏の知慧を開いた自己の光明である」と』<sup>(16)</sup>。

『十方』巻の中で道元は、さらに観点を移し、宇宙万有（略して「生」と称す）、世尊と彼の如き無上正覚者（略して「祖」と称す）および絶対的な生命（略して「仏」と称す）、換言すれば、生仏祖の相互関係を下記の如く説示する。

『自己の握りこぶしは、全世界そのものである。自己の赤心、清浄心の一大光明の輝きは玲瓏として全世界を照明し尽くしている。釈迦牟尼仏は、衆生に告げて、「この十方の仏土の中には唯一乗（唯一無二の乗物）の仏道のみがある（迷いの衆生を乗せて悟りを得させる）」と言われた。…この現実の世界が仏の国である以上、この仏国の国王は仏である。この道理からいうと、世界は釈迦牟尼仏の国、即ち仏の国である。（主観の現象と）客観の現象は悉く皆自己の仏心の現成である。「心外無別法」で、この世界は自己の仏心の外に何のものもないということである。…このような十方仏国土の十方仏は、大小、浄不浄の対立を超越した存在である。…釈迦牟尼仏は、大衆に告げて、「唯我のみが、是の相を知る。十方の仏もまた同じである」と言っておられた。…是の相とは、我が相であり、知の相であり、一切の相であり、十方の相であり、世界の大地〔根本〕の相である。…長沙景岑禪師が大衆に告げて、「十方界は、是れ、沙門（出家）の一隻眼である」と。…「十方世界は仏身」のありのまま、十方世界仏身と見るのである。十方世界と釈

尊の全身とは一体であり、一如のものであるのである。同じく長沙禪師の上堂の語に、「十方世界は、是れ、自己の光明」という句があるが、自己というのは、自己は太初以前の自己、絶対的な自己、真理としての自己、宇宙原理としての存在である。…真理としての自己が現象化して、現在の自己の存在となっているのである。十方世界の現成が自己の現成である。…十方世界が、自己そのものであるから、自己としての自己も、他己としての自己も、自己としての他己も、すべてこれ十方世界である。自己即ち他己、他己即ち自己と十方世界と自己と一体のものであり…一如である。…玄沙院宗一大師が言われた。「十方世界は、一顆の明珠である」と』<sup>(17)</sup>。

『谿声山色』巻の中で道元は谿声山色を初め、一切世界の万我物事象が御命たる仏とその性質を説くという事をこう描いている。

『谿声は、仏の説法に外ならない。山の姿は、仏の清浄身そのものである。八万四千（一切経）の偈をたえず、これを人々に説くことであろうが、それらの人々は、果してその真意をとらえ、その風韻いんを体得し得るであろうか」。…ここで哀れむべきことは、（谿声山色などは）昔から今に至るまで、仏の現身そのままの説法である。…多くの（人々と）修行者は、耳で聞く谿声、眼に映る山色を感覚、意識するのみである。仏の相、形が、山水に隠されている声色あることを知らず…体得しないことである。…山水の説法は、瞬時も止らない、常説法であり、山色の相はそのまま〔仏〕の清浄身であり、ありのままの無限の真理としての生命なのである』<sup>(18)</sup>。

そして、33才の時に、「正法眼蔵」の予告巻とも言われる「現成公案」巻の中で道元は、「水中泳魚えいごと空中飛鳥ひ」という譬説をもって、仏様と一切他界と、その万有千化の道を次の如く著述する。

『魚うおが水を行くとき水には限りがなく、鳥が空を飛ぶとき空には限りがない。しかし魚や鳥は昔から水や空を離れず、広く行く必要があれば広く行き、狭く行く必要があれば狭く行く。そのようにして、それぞれの道を尽くしているとはいえ、鳥が空を離ればたちまち死に、魚が水を離ればたちまち死ぬ。魚が水を命とし、鳥が空を命としていることを、人は知っている。その上は鳥の無いところには空は無く、魚の無いところには水は無いことを知りなさい。命は鳥において実現し、魚において実現するのである』<sup>(19)</sup>。

先程紹介したわずかの文からも明らかであるが、道元は「正法眼蔵」の諸巻、特に、現成公案、仏性、即心是仏、一顆明珠、心不可得、光明、恁麼、有時、全機、谿声山色、山水経、春秋、三界唯心、諸法実相、無情説法、法性、十方、遍参、如来全身、生死、深信因果、三時業と唯仏与仏の巻を通じて、仏様（とその絶妙極まりのない性質）、一切劫界（とその万有千化の徳力）、仏と一切劫界（略して生仏）の道およびその相互関係を様々な観点から脈々と詮といでいる。

心眼の感知的な分別・識別や分析の機能を用いて自他内外を観ると多種多様な世界が四方八方に広がっている事を誰もがよく承知している事実である。人類は、このような識量眼で過去・現在と未来、万我物事象とその性質徳力の能所（現実とその可能態）、相体用およびそれらの万変千化を把握し、研究し、検証しながら宇宙万物の理解を深め、その成果を様々な目的のために使用する。我々の人堯の家であるこの宇宙には、人間の想像を絶する膨大な銀河系が尽十方に膨張ひろがり、その空間に数え切

れない日月星辰が漂っている。我が地球の無情（無機物質）界だけを取って見ても、山川草木、谿声海唸、春華秋月、そして万有万象の起滅、化育発展、隠現、増減、動静、進退の初中後、物事の大小、長短、堅柔、深淺、美醜や淨穢などの世界が広がっている。さらに、人間界を取り上げて観ると、生死、老若、苦楽と禍福、人知の正邪、真偽と盛衰、人心の本音と陰湿的な騙し、迷悟、善悪、虚実、希望と失望、人体の遺伝的な優劣、親子・兄妹と夫婦関係の多様性、冷暖、憎愛、無関心と寛寥、社会的な変動、貧富、貴賤、聖俗や和戦などの世界が非常に複雑に絡り合っているという事を否定する者がもはやいないであろう。この万眼千眼で把えた世界が実存する現実であって、ありのままに現実でもあるが、これだけが真理であって、この眼のみが万世千界の真理を知り尽せるものであるという事ではない。道元は、「自然科学の万能」という有限人知の傲慢で錯覚的な信仰を否認し、左のような見解を「凡見」や「謬見」、その眼を「俗眼」や「分別眼」と呼ぶ。この識量眼は人間の玄通眼の一悸一現であり、一切世界とその万相眞実を覗かせる小閣であり、万我物事象の豊美の一閃一塵であると古今東西の聖哲が教え、人類の日々体験がそれを証明している。

先程描いた宇宙の現実を、心眼の超感覚的な機である通総眼とも通徹眼とも称ぜられる「只管打坐」の眼、「身心脱落」の眼又は、「脱落身心」の眼でみると、過去と現在（そしてそういった古今経験に基づく未来）の劫界（無量の時間と無辺際尽十方界）の本末・根底に横たわっている「太極的な世界」に気付く事が出来る<sup>(20)</sup>。さらに、この太極界は、自らの生命力を消耗壊滅せず、一切劫界の万我物事象の實在をあらしめながら養い育ち、遠い昔も今日今瞬も、何も礙げず、何ものにも礙げられず、ありとあらゆる存在、その相体用と万変千化を隙間なく隅々まで浸徹しながら通総し、万遍なく一切心として貫（泌）徹しながら君臨する「実存力」・「存在力」・「生命力」である。このような「存在」を「普遍の実存力」・「通総的存在力」や「太極の生命力」と呼ぶ。しかし、この生命力は、極大の宇宙とその銀河星辰のような「一有」でなければ、極微の宇宙とその超微粒子や微生物の如き「微小体」ではなく、あらゆる隠現界内の「一我一物」や「一象一事」のような個でなければ、「一相一態」や「一機一変」の如き徳力でもない。さらに、この生命力は、万世千界とその万有千化を構成する「一要素」や「一部分」でなければ、極大や極小の宇宙万物と融合した「融化体」（色んなものがとけあって新しいものに化する）でもなく、「融和体」（様々なものがとけあつて一つのものとなる）でもない。又、「混成体」（多物が混つて）、「混同体」（本来別々のものごとが混ざって一つのものとなる）や「混茫体」（とりとめもなく物事がまざつて区別がつかないさま）などのような固体、気体や液体でなければ、以前、太古の昔に、一切世界の根元・本源や基有として実存したが、宇宙の開闢と化育進退につれて、徐々に消耗しながら歳月を重ねた挙句の果てに絶滅し「帰らぬモノ」と成ったのでもない。さらに又、この普遍的な「実存力」は、幽体や幽霊のような存在でなければ、本来隔絶で隠然たる「霊体」や「霊力」などのようなものでもない。であるが、この生命力は、一切古今の世界、万我物事象とその万徳千力を単に隅々まで通総しながら泌徹するだけではなく、同時に、何時何所でも全く妨害されないうままで一切を透脱しながら超絶し、一切の起滅生死、隠現動靜、膨縮増減、強弱や進退などのような現象的な変化に引っ掛からないし悪影響も受けないままで実存しながらそれらの世界を超脱（越）する不可解で不可思議な「生命力」である。それ故に、道元はこの生命力の無限無尽性を表わすためにそれを「御いのち」、「仏性」、「仏心」、「法性」、「唯一心」、「如来」、「虚空」、「真人」、「恁麼」や「不可得心」などの如き、多様な名称で呼ぶのを好んでいた。要するに、「御命」である仏様とは、一切の過去・現在と未来の万我物事象、その万相様態および万徳千力をして、即ち、個々の我物として、各々の事象として、一小一大として、一素一徳として、一顯一隠として、一相一態として、一進一退として、一機一変などとして実存しながら活現成すると同時に、一切劫界とその万有万象を無限に絶

する『超徹いのち的御命』であり、『絶対生命（力）』である。この不思議な御命は、万世千界とその万我物事象などとして無量無辺の変化流転をしているが、いくら万有万象として変容変転（起滅生死、隠現強弱や膨縮増減など）しても、宇宙万物内の一我一物に成ったり、一個一変に耗滅したりする事がなければ、非通総的や非超徹的な一有一象に転じたりする事もない。さらに、非実在や非生命に流転したり、自からの性質徳力の世界において、全面で100%の『絶無』（完全な「ゼロ」）に変成したりする事もないと道元は主張する<sup>(21)</sup>。

では、一切の識量眼（感知的で自然科学の万眼）で把握し理解出来る世界万有とは一体何であろうか？

道元禅師によると、万世千界とその万我物事象等の一切が真に存在する世界であり、無限無尽で超徹的な御命である仏様（仏性）の自由自在<sup>(22)</sup>で多種多様な顕現とその形態であり、仏様の活動とその経歴経過の自然で必然的な成就・成果・実りである。換言すれば、万有千化は仏命（無限無尽の御命、永遠真実界の本然性）の活現成である。要するに、人間が仏命の人我的活現成であり、動物が仏命の動物的活現成であり、日月山河は仏命の日月的と山河的な活現成であり、宇宙の大小・空間・事物徳力とその万変千化の各々は、仏命の大小的・空間的・事物的・徳力的や変化的な活現成であって仏命全機はたらきの十分で不足欠陥のない熟した成就（実り・果）である。しかし、仏心禅とも呼ぶことが出来る道元禅<sup>(23)</sup>の身心学道における身心脱落の修証一如の生き方（宗教即身心善道）を単に傍観し、自から己れの人生において実践しようともせず、論著の知識、自然科学の万能の上辺や世間有名人の多眼をもって「正法眼蔵」を読む者は、禅師が力説する「仏命（仏性）の活現性」（公案現成、全機、如来全身や唯仏与仏という巻中に解かれている）の真諦（普遍道理）を謬って「仏性とその活現成（身である宇宙万物）がそれぞれの本然性質（とその徳力）において全面的に100%で同一同等である」と理解するのである。しかし、「自己現成界」の道理を精密に熟察すると先ほどの解釈が謬論であることに気付く。先ず、活動・働はたら（機）きや活現する主体（を作者や動者と呼ぶ）、その活動が活現という行為自体、そして、その行為に因（依）って生成しょうする結果、成就する実りとは、それらの内容の本然実質において同一又は同等であるが、内容の本然自性（元々の性格）においてそれぞれが永遠に異なる。言い換えると、「自己」、自己の活動や活現の行為自体、そして自己の活動の成果の内容の性格・位格が自然で必然的に異なるが、それら（三つ）の内容の本質（である内実自体の身）が同一、又は同等である<sup>(24)</sup>。第二に、活動や活現は、自然で必然的に適切な成果を挙げ、適した実りを結ぶ。次に、作者の活動や活現の行為自体は、作者（事物・現象や徳力）の内容やその機能の全面全体を顕現し尽せなければ現成し尽せない。作者の活現の実り自体も、作者の内容やその機能の全面全体を100%で絶対に現成出来ないし、尽し得ない。もし作者の活動やその活動の結果は、作者の内実やその能力の全体を全面的に100%で顕現し、又は（実りとして）成就し尽したならば、作者が全滅する（100%のゼロになる）、又は、もう一人（もう一物、もう一徳）の同一作者が生成する事になる。しかし、このような事が不可能であり、未だ生じた事実はない<sup>(25)</sup>。次に、ありとあらゆる有限の作者の一切の活動とそれらの結果は、何時でも何処でも、自然で必然的に「有限」の実在であり、「個的」な我・物・事象や徳力を生ずる。有限の実在が無限の活現や成果を生成する事は永遠に出来ない。そしてもう一つ。無二無窮で無限無尽の作者の活動の経歴や活現の行為が、時間的にも空間的にも自然で無限無尽であり得る〔このことを作者は自から決める事〕が、その活動や活現の成果・現成体・生命体や実在体（内容）として、自然で必然的に個であって有限でしか在り得ない。何故かと言うと、もし唯一無二で無限無尽の作者は、

もう一つの唯一無二で無限無尽の存在を生成したならば、その瞬間で本然の無二無窮性と無限無尽性を永遠に失う事になるからである<sup>(26)</sup>。

先ほど略記した「自己活現成」法は、人知の気紛れで創定された暗中模索でなければ、妄想の副産物や英雄物語でもなく、仏様の無上宝蔵界に根差し、その本然自内性界（「御いのち」を「一切の本末心」たらしめる徳力海）の在り方・永遠の秩序に遵ずる、仏様の自己活現成（多種多様な活動、体現・具現・妙現等の無量顕現とそれらの成就）の普遍的な道理である。それ故、在りとあらゆる過去・現在と未来、その隠然〔人知の境界を超越する境地〕たる又は顕然たる〔一切の現象界〕世界、それらの万我物事象と徳力能所〔もうすでに活躍している徳力と、〔何時か活躍するであろう徳力〕〕、さらに総べての相対と対立、相層と形態、本性と本質、位格・性格と体格、属性と属質、大力・微力と妙力（神通力）、因縁と果報、迷悟と修証（努力・修行とその結果）、動靜と優劣、万変千化とその経過の一つも残らずに仏力の全機による仏命の真・善美と清浄の無端無極の世界の時所（処）的、隠顯的、我物事象的などの活動であり、多種多様な現成・個性化と個体化であり、仏徳仏力の開闢発展（開華）であり、啓示（「仏の語」・「仏の舌」）であり、人知の境界を絶する無限の実現への成就の道（仏道）である。こうして、人間や諸天などの如き、一切の有限界の計謀を絶する不可解な妙猷（仏旨）とその本然徳力の不可思議な活現の道理に循じて、仏命は、アメーバと成り、癌細胞と成り、人と成り、汝と成り、吾れと成り、踏み絵と成り、擬い仏と成り、墮胎児と成り、地球と成り、星雲と成り、宇宙空間と成るが、銀河系も万劫千界も、その全崩壊も仏命海の豊富を永遠に使用し尽せない。この「御いのち」を空っぽにしたり、絶無・100%のゼロにしたりする事が出来る存在が一つもない。一切の太極心である仏様は、全ての我物事象等に、各々に適した性質徳力を賦与し、一瞬一寸も休まずに、各々を生子とし、さらに一切を生身（生きている御身）として養い生かす慈愛仏である。そして、万有千化とその徳力の一切は、仏命を生きている「仏子」として、実有として皆平等であって、仏様の世界から離れる事が出来なければ、仏命との絆を永遠に断ち切る事も出来ない<sup>(27)</sup>。道元禅師は、長沙景岑という中国の禅僧の言葉を借りて、『全宇宙は仏身であり、仏の知慧を開いた自己の光明である。…十方世界も…谿声山色などの万有千化も昔から今に至るまで仏の現身そのままの説法である』とはっきり著している。又、別の折りに、禅師は「在りとあらゆる三界は唯一心の活現成である」と述べると同時に、この「三界はすなわち心（唯一心）というにあらず」と強調しているのである<sup>(28)</sup>。

一切の真実界を偏見のない思慮分別のある眼で解析すると、無量無辺の多様界の現実に魅せられる事は言うまでもない。同時に、超感覚的な通総眼で同じ世界を観ると、一瞬一寸の隙間もなく、あらゆる多様性・対立と障碍に引掛かることなく、全多様界とその一個一変も深奥の淵まで弥綸し、実存力・生命力で充盈しながら、それを泌徹する「一様」とか「一如」のような妙界の現実に気づく事も決して稀れではない<sup>(29)</sup>。しかし、この多様界と一如界は、本来別々であったがある時点でくっ付いたり融合したりする世界でなければ、別の第三者によってくっ付けられたのでもない。一方は現実であるが、もう一方は虚実であったり、虚構や閑人の空言であったり、又は、根処の全くない単なる幻想であったりするのでもない。さらに、それらの世界は、二者択一的でなければ、お互いを排他するのでもなく、支離滅裂や荒唐無稽でなければ、矛盾を内包する同時虚実の世界でもない。この多様界と一如界というのは、人知の正覚眼の思慮分別眼と通徹眼という二つの異なる見地から詳察した同一の一切真実界の実存の自然で根本的な「様態」であり、その活現成の「二相」である。そして、上記二眼の視点と把えた現実（真実）を通総しながら透脱し、又は、通和しながら超脱する超徹（無我）的眼でみると、「御いのち」である仏命とその本然自内性とみなされる「仏性」は、在りとあらゆる



世界の一如の一切心である。一方、万世千界とその万我物事象は、その仏命の実存する様態であり、無量で測り知れない活現成（仏行）であり、仏命の生身なまみであると解かる。道元は、仏命（とその妙力）を公案〔遍在する真理〕、仏性、仏心、唯一心、諸法の実相〔一切世界の至極〕、虚空〔無定相〕、行仏、法性、恁麼〔神秘の境〕、如来〔かくの如く自然で必然的に現成する〕、御いのちや不可得心などと呼んでいた。宇宙万物を十方、尽十方界、諸法諸行、公案の現成、空華〔永遠無辺境が咲かす華〕、仏性の光明、谿声山色、山水経〔宇宙万物が語る真理〕、仏土、仏国土、春秋、如来の全身、真人の体〔絶対の眞実である悟智の御命の生身〕、生死去来〔の世界〕や娑婆界しやばなどと呼んだ。そして、仏様と万世千界〔略して「生仏」〕を『公案現成、現成公案』、『一顆明珠』、『唯仏与仏』や『仏道』という語で呼ぶのが好きだった。こうして、禪師が説示している仏性と万劫千界の根本で性質的な関係を下記の五つの連結に譬え、まとめる事が出来る。

- ～ 仏様と宇宙万有は「君臣一国」のような世界である。「十方」巻の中でこう述べる、『仏土なるゆへに、以仏為主なり』。
- ～ 仏様と宇宙万物は「親子一家」のような世界である。「唯仏与仏」巻と「諸法実相」巻の中でこう語る。『諸法実相、唯仏与仏なり。諸法は与仏なり、実相は唯仏なり』。さらに、『三界唯心』巻の中で「悉是吾子…かならず身体髮膚を慈父にうけて…」と述べている。
- ～ 仏様と宇宙万有は「師弟一門」のような世界である。「三界唯心」巻の中でこう言う。「尽十方界沙門一隻眼なり」。
- ～ 仏様と万世万界は「心身一如」のような世界である。仏様は一切心として、宇宙の万我物事象はその一切心の生身としてしばしば描かれている。
- ～ 仏様と万劫千界は「真人人体」のような世界である。「三界唯心」巻の中でこういう語句がある。「全宇宙は仏身であり、仏の知慧を開いた自己の光明である」。そして、同巻の別な所で「衆生は尽十方界真人人体なり…」と記す。

道元が詮いた生仏の関係をまとめて言うと、一切の世界とその万我物事象を「一と参じ、多と参ずるべからず」と同時に、仏様を「虚きょにあらずと学し、性しやうにあらずと学すべからず」という見解が主張されている。そして、在りとあらゆる古今未来の尽十方「三界はすなはち心〔唯一心〕といふにあらず」という立場も明示されている。要するに、仏様と宇宙万有は各々の実在自体・生命自体の実質において、「存在」として同じであるが、実在・生命の本然徳力の範境・位範・位格・位量や量範。（を合わせて「本然の性」と言う）において永遠かつ根本的に異なる。従って、仏様も、鳥宇宙も、月も、汝も吾れも、病原菌なども「実存する」という事実において全く同じである。しかし、同時に、仏様の御命の徳力の範境・位格などが、「範」・「位」・「格」・「量」等という限定を許さない「絶妙の極まりない」無限無尽のヒロガリを本有するのに対して、星雲の徳力の範境・汝や吾れの徳力の位格（これを「人格」と称す）や遺伝子細胞の徳力の量範などの万有千化の徳力能所の範囲が天然（自分本來、さざけら、されたモノ）で必然的に何時までも何処までも有限で、限界があるという「事実」において、仏様とその他界他有は根本的に異なる。よって、仏様と万劫千界は本有する徳力内容を取り換えたりする事が出来なければ、交替したり又は相容れたりする事は永遠に出来ない。さらに、宇宙万有は、仏様の活現成身（子・巨民や弟子）である以上、その存在において永遠に依存し、仏様の御命の無崖海がいのとその活現成法の外に出たり、その結果を無視したりし得る世界や我物事象が一つもない。一方、仏様は在り

とあらゆる劫界や万有千化の本末としてウラづけているがそれらに依存しない。そして、仏様の御命は、星雲も、汝も、微粒子などの一切劫界を絶え間なく極め尽くしているが、銀河群も、アインシュタインも、汝も吾れも仏様の徳力境海を永遠に極め尽くす事が出来なければ、仏様の妙猷<sup>みはからい</sup>の実現を妨げる事が出来ない。

## (2) 仏の根本徳力を詮く

今まで、仏様と宇宙万有の相互関係、特に、その関係を発祥地とし軸とする仏様と万世千界の根本的な性質徳力に焦点を合わせ、道元禪師が会得した真理の主旨を独自に解釈した。これから論考の焦点の範囲をもっと絞り、道元が詮く<sup>ひっちゅう</sup>匹儔なき仏様の本然自内性の根本徳力の理解大意を独自に提唱する。今度も先ず、禪師の論篤撰文に耳を傾けて、その意味を味わおう。

『正法眼蔵』の「仏性」巻の冒頭に道元はこう語る。

『釈迦牟尼仏言、「一切衆生、悉有仏性。如来常住、無有变易」。…釈尊の言われる、「一切衆生、悉有仏性」という言葉の真意は何であろうか。それは、「名づけることのできぬ何ものかが明らかに現前している」ということである。ある時には「衆生」と言い、ある時には「有情」と言い、…「もろもろの生物」、…「もろもろの生類」と言うのは、みな衆生の事であり、一切存在のことである。つまり、一切存在の凡てを衆生というのである。その時衆生の内も外も、悉くが仏性である。…ここに言う仏性は、今始めて有るもの（始有）でも、本来有るもの（本有）でもなく、有無を超えて有るもの（妙有）でもない。まして、縁によって（縁有）…迷いによって有る（妄有）ものでもない。また、心や対象、本質や外面的性質というように、限定して考えられるものでもない。…過去の行いによって生じるもの（業増上力）でも、迷いによって（妄縁起）…自然に生じるもの（法爾）…神通力によって生じるもの（神通修証）でもない。…仏性〔仏命〕は少しもまじりけのない全体であって、この世界には仏性以外の、何ものも無いのである。…仏性は本来あるもの（本有の有）ではない。それが時を超えているからである。仏性は、今ことさらに始まるもの（始起の有）ではない。それが塵一つも迦えないからである。仏性は一つ一つあるもの（條々の有）ではない。それが普遍的なものだからである。仏性〔の顯現〕は始めを持たないもの（無始有の有）ではない。何ものかが、ここに現前しているからである。仏性は、取立ててあるもの（始起有の有）ではない。平常心が仏道だからである。仏性が何ものとも対立するものではない…何ものにも捉われず、何ものにもこだわることもない。…たとえ覚者・知者を仏というとしても、仏性そのものは覚知でも分別（思慮）でもない。…仏〔の御命〕とその仏性は一つである。…仏性は万物に互っている。…仏性はこなごなでもなく、固まってもいない。…凡ての対立を超えて現前しているのであるから、大きくも小さくもない。一度仏性と名づけるからには、仏〔の御命〕と対立させてはならない。仏性そのものと対立させてもならない。…山河大地みな限りない仏性の海である。…個別的な事物の一切が仏性〔仏命・仏様〕の現前である。…どのような時を無〔限の〕仏性というのであろうか。仏の境地を…仏に囚われない仏を…自由自在の境地を…仏性の成就した時を…発心の時を無仏性というのだろうか。（一切の物事、一切の時節が）無〔限〕仏性の現前である。…なぜ「無」というのかというと、仏性は空ですからゆえに空というのである。…空は「無」いではない。…空は無をいい表わす。…「凡てのものが無である」と

いう無は、無〔限〕仏性〔の現成〕であることを学ぶべきである。…仏の相を現わすこともまた単なる身体の上に行われるものではなく、仏性自ら〔本然自内の徳力の〕自由な働きによるものである。…（例え、）龍樹の仏身は…今ここに〔無限無尽の〕仏の人格仏の相として現われているのである。…仏性の相は円月の相～「無相三昧」～〔固定した〕相のない相（のようなもの）である。…龍樹の「身現円月」の相を描くには、法座の上の仏身の相をもってすべきである。…仏性は常に今の姿を離れてはありえないのである。…仏性は、生の時にも有〔限〕仏性であり、そして無〔限〕仏性である。死の時も…散り散りの時にも有〔限〕仏性であり、そして無〔限〕仏性である。…仏性は動不動によりて在不在し、識不識によりて神不神なり、知不知によりて性不性なるべきと邪執せるは外道なり。永く久しく、多くの愚か者達が、心を仏性とし、覚者として来たが、笑うべきである』<sup>(30)</sup>。

『見仏』巻の中で、仏様（如来）の相について禅師はこう著述する。

『自己の世界も他己の世界も、久遠の過去も今も、悉くがみな見仏の修行そのものである。…釈尊の語の「若し諸相は非相と見る」という事を取り上げて、参学眼（参仏眼・正法眼）の開けていない人々が「諸相を相でない」と見るのは、即ち如来を見ることと誤解している。その理由は、諸相は相ではない。この相が如来そのものであると考えるからである。…実は見如来（如来を見ること）と不見如来（如来を見ずこと）とが、同一であることを、両面より表現したに過ぎない。…釈尊のいう見如来は、…諸相は如来相であって如来相でないものは一つも混ってはいない。この諸相は仮にも非相（如来相に対する非）とすべきではない。…諸相は如来相であるから、諸相は、ありのままの諸相が真理であることを体験すべきである。…諸相は仏の相である、仏の本性であることを参究し見仏して、それを明らめ、信じ、証さとって護り相續すべきである。…諸相が如来相であることを見ることを透脱しきることである。…仏の真面目を見るのも、師の真面目を見るのも、自己や他己の真面目を見るのも、すべて親しく直接に仏を見ることである』<sup>(31)</sup>。

『恁麼』巻の中で道元は、恁いっも麼の在り方、即ち、超徹心の道・仏性の道を次のように語る。

『仏道（恁そのこと麼・真理）のあり方は絶対的なものであるから、人為的にはどうにもならぬものであり仏〔無上正覚者〕の智恵でも測ることのできぬものである。全宇宙の心の働きでも測ることはできない。…ものごとの本質は「恁そのこと麼」にほかならず、身心の本質は「恁そのこと麼」にほかならない。仏の本質は「恁そのこと麼」にほかならない。…（無際大師いはく）「恁麼也不得、不恁麼也不得、恁麼不恁總不得」換言すれば、「有仏性也不得、無仏性也不得、無常仏性〔一切として実存しながら一切を超脱する仏性〕也不得」という真理である<sup>(32)</sup>。

周知のごとく、道元の仏性観は、「仏性」巻、「恁麼」巻や「見仏」巻に限定されているのではなく、ほとんど「正法眼蔵」の全巻に互って、様々な見地から詳細に詮かれているのである。禅師が唱道する仏性観の大意をみごとに捕えた岡田宣法の『正法眼蔵思想大系』という長論講から示唆的な文を撰び、紹介しながら〔 〕内で独自の解釈を施すことにする。

『山河大地みな仏性海なり』と云ふのは、仏性の宇宙的な遍在を主張されるものであり、「草木叢林の無常なる…人物身心の無常なる、すなはち仏性〔の活現成の経歴なり、一相一態〕なり。国土山河の無常なる、これ仏性〔の活現成の具体化〕なるによりてなり」と云ふ宇宙間の一大変化推移までも仏性そのもの〔の活現成の一相一機〕と主張されるのである。…絶対であり、普遍である斯くの如き仏性は、限りなき時間と限りなき空間とを通じての存在であり、尽界一枚の仏性であるから、この仏性は、人間の生死によって存否が規定されるものでもなく、山河大地の存没によってその存否が制限されるものでもない。人間の生死も、宇宙の存没も、其は悉く仏性それ自体〔の活現成の一相一用〕と云ふべきである。…仏性は或は法性…或は心…又は即心即仏と云ふ人格的な名称と呼ばれ、乃至、無仏性と云ふ反立的な否定的肯定でも説かれてゐるけれども、その本質の内容は一である。即ち「無量の日月は法性の経歴なり」とあったり、「青黄赤白これ心〔の活現成の一種一態〕なり…年月日時これ心〔の活現成の一相一瞬〕なり」とあったり…而して又即心是仏の心をば、「心といふは一心一切法、一切法一心なり」と説かれるのは、いづれも仏性と〔その本然自内性ではなく、本然実質において〕同一内容のものであり、而して物心統合の心である。…その仏性・法性なるものは抽象的なものでもなく、一元的なものでもなく、一切の万有それ自体が仏性それ自体〔の活現成の一相一用〕であって極めて具体的なものである』<sup>(33)</sup>。

『高祖道元は…本来の仏性に不完全性の存すべき筈はなく、勿論完全性のものである。然し完全不完全と云ふ評価は、仏性の冒瀆となろう。仏性は元来無生〔生じた事のない永遠生命〕にして無〔限〕能であり空である。空といふけれども「いはゆる空は、色即是空の空にあらず、色即是空といふは、色を強爲して空とするにあらず。空をわかちて色を作家せるにあらず。空は空の空なるべし。空は空の空といふは、空裏一片石なり」(「<sup>仏性</sup>」)といふ空であるから、空の外に無物にして物外無外の空である。換言すれば色外無空、空外無色の空でもある。されば五祖弘忍が「<sup>同卷</sup>」<sup>(同卷)</sup>とは即ち此である。されば完全性不完全性の評語は不成立となり、妥当ではない。斯くの如き佛性は何人にも悉有であるから、悉有の意義もその理解が困難となるであらう。何となれば、高祖〔道元〕は同卷に「悉有の言、さらに始有にあらず、本有にあらず、妙有にあらず。いはんや縁有妄有ならんや。〔同じく、万世現象界の〕心・境・性・相等にかかわれず。しかあればすなわち、衆生悉有の依正<sup>えしやう</sup>、しかしながら業増上力にあらず、神通修証にあらず」と示されるのである。故に佛性を以て「佛性をしらんとおもはば、しるべし時節因縁これなり。…時節すでにいたれば、これ佛性の現前なり。…時節因縁<sup>にい</sup>なり、超越因縁<sup>にい</sup>なり。佛性<sup>にい</sup>なり、脱体仏性なり。仏々<sup>にい</sup>なり、性々<sup>にい</sup>なり」(「<sup>同卷</sup>」)と示される。時節佛性観は「時節の若至せざる時節いまだあらず、佛性の現前せざる佛性あらざるなり」(「<sup>同卷</sup>」)と主張して、佛性の盡時性を説き、無限の時間的存在と見るに至って、佛性の普遍性が佛性論史上に空前の発展的な獨創的見解を發揮し、人生論的範疇とされた従来の佛性観は、普遍性と、従って永存性とが與へられ、そこに宇宙学的な性格を有する存在となったのである。…宇宙的佛性は大小の評価を拒絶するものである。『偏枯に佛性は廣大ならんとのみおもへる、邪念をたくはへきたるなり。大にあらず小にあらざらん正當恁麼時の道取に罣礙せられん道理、いま聴取するがごとく思量すべきなり』(「<sup>同卷</sup>」)と云はれるのである。既に大小を絶した佛性であり、絶対であって遍在のものであるから、「不依倚一物、これ十二時中なるが故に佛性明見なり」(「<sup>同卷</sup>」)とする獨一的佛性ながらに無限の時間それ自体とする存在である他面に、『草木叢林の無常なるすなわち佛性なり。人物身心の無常

なるこれ佛性なり』(同卷)と云ふ無常推移の存在として肯定されるところに宇宙的性格が備って来るのである。ここに於てか佛性の遍在は附帯的な遍在でもなく、覆蓋的な遍在でもなく、宇宙即佛性〔の活現成の無量相体用〕、人生即佛性〔の活現成の人格化〕として、換言すれば空是空の空とは、色是色の色とは、法住法位世間相常住の佛性として遍在である。形而上又は形而下の對論を許さない遍在である。…絶對にして普遍である斯かる佛性は、無限なる時間空間を通じての存在であり、盡界一枚の佛性〔尽十方界が仏命海の表・顯隱であり、その一心が仏命海の裏・無尽無極の妙界〕であるから、人間の生滅によって其の出没が規定されるものではなく、山河の存没によって佛性の存否が正比例するものではない。故に高祖は「佛性は生のときのみにおいて、死のときはなかるべしとおもふ、もとも少聞薄解なり。生のときも死のときも有〔実存する〕佛性なり、無〔限の〕佛性なり。…佛性は動不動によりて在不在し、識不識によりて神不神なり。知不知に性不性なるべきと邪執せる外道なり」(同卷)と具体的に教示する。斯やうに佛性は、法性の異名に於て、或は單に心と云ふ名稱に於て提唱され、或は三界唯心といふ記述的な名詞に於て、或は不可得と云ふ神秘的な名によって、或は即心是佛と云ふ人格的な寫象に於て、或は無佛性と云ふが如き反立的否定的肯定語によってすら示されるのであつたが、然しその本質的な内容に於ては全く一である。「法性」の卷には「無量劫の日月は法性の經歷なり」とあり、「三界唯心」の卷には「生死去来これ心〔の活現成の一相一機〕なり」とあり、年月日時これ心〔の活現成の一相一用〕なり。夢幻空華これ心〔の活現成の一相一機〕なり。水沫泡焰これ心〔の活現成の一相一用〕なり。春華秋月これ心〔の活現成の一相一機〕なり。造次顛沛これ心〔の活現成の一相一用〕なり」とある。「心不可得」卷に、「佛道には盡地みな心〔の活現成の一相一機〕」とあり。「即心是佛」の卷にはその是佛なる即心を以て「心といふは、一心一切法、一切法一心なり」と云ひ、「心とは山河大地〔をして自らを現成する〕なり、日月星辰〔をして自らを現成する〕なり」と云ひ、「發無上心」の卷には「いはゆる心は心如なり。盡大地の心なり」とある。又「佛性」の卷に「無佛性いまだ見聞せず道取せざるは、いまだ作佛せざるなり」とあつて、〔その本性ではなく、本質において〕佛性と同一存在とされて居る。斯くの如き廣大無辺なる佛性である以上、吾人は如何なる名稱を以てするとも、名稱のみにては絶対に佛性を把握することは至難である。ここに心不可得といふ態度が必要となる。故に「心不可得」の卷に「おほよそ牆壁瓦礫にてある佛心あり。三世諸佛ともにこれを不可得にてありと證す。佛心にてある牆壁瓦礫のみあり、諸佛三世にこれを不可得なりと證す。いはんや山河大地にてある、不可得のみづからにてあるあり。艸木風水なる不可得の、すなはち〔無限無尽の〕心〔の活現成の無量形態〕なるあり」と云はれるのである』と岡田宣法氏が指摘する<sup>(34)</sup>。

仏様の本然自内性の不可解性、その徳力の不可測性と永遠の不可得性〔それらの全てを100%で体験体得不可能〕を道元はこう詮している。

『釈迦牟尼仏言、過去心不可得、現在心不可得、未来心不可得』<sup>(35)</sup>。

『心不可得というのは、心の本性はもと無〔限〕自性のもので、得ることのできぬものである。…この三世にわたる心の不可得そのことが、諸仏そのものである「心不可得」の保護、任持の現成である。衆生の生死流転する世界、三界の心も亦、不可得である。「あらゆるものごと」(諸法)の心も亦、不可得であることを、諸仏は保任し、体験して来られたのである。…いわゆる仏心と

は、過去、現在、未来の三世である。仏心と三世とは〔各自の本性ではなく、本質において〕同体であって、少しの間隙もない。…仏道においては、森羅万象のすべてが心そのもの〔の活現成の多種多様で隠顯的な具体化〕であり、起滅によって変化することはなく、一切の「ものごと」はすべて、心そのものであり、その働である…牆壁瓦礫と、古仏心も森羅万象すべて心不可得である』<sup>(36)</sup>。

上記の文を始め、「正法眼蔵」が論篤する仏海とその一切心たる仏様の無量面々を超徹眼で理解しようと全力誠意を尽くした先哲、又は、今なお努めている学徒の論述を背景に、仏様の本然自内性の根本徳力の世界を覗いて見よう。そして、説示を重複しないために、既に説明した仏様と宇宙万有の相互関係、取り分け、その関係を発祥地と土台とする（狭義の）仏様のみの根本徳力の要最を略述する。

- 一、「仏様」とは、一切の隠顯的な劫界、その万我物事、徳力、変化、動静、時所、様貌形態や感知悟靈などの内に固定した一つの世界、一個一変、一機一静、一隱一現、一力一能、一相一態や一妄一念でなければ、そのような現実に変成したり転顯したりするモノゴトではない。即ち、仏様とは、万有内の始有、本有、末有、因有、縁有、果有、性有、質有、虚妄有、妄想有、念有、善有、悪有、我有、無我有、美有、汚染有、醜有、靈有、物体有、神通力、修証、流転有、行為、変化、静有、動有、基有、浸徹有、超越有、隔絶有や虚実有の如く固定した「一者一物」や「一個一象」ではない。
- 二、「仏様」とは、在りとあらゆる劫界、その万我物事象や徳力変化などを構成し、その奥境に横たわる共通で要不要の素層・附帯や覆蓋物の如きモノでなければ、それらの万有千化の未開未発達の種子や未公開未発展の能力のようなモノでもない。
- 三、「仏様」とは、無始の過去より実存し、化育発展と諸々の進退、膨縮や増減を繰り返して来た隠顯的な宇宙万有の活現経歴のある時点で生じた「総成果」や「100%の新結果」でなければ、100%の存在的な絶無（ゼロ）から、何の因縁（の働き）なく、突然で偶然に発生し、無秩序で支離滅裂な成長等の過程を経て、一切世界の最高位に登り着いた無上無比で超越的なモノゴトでもない<sup>(37)</sup>。
- 四、「仏様」とは、非大非小、非陽非陰、非動非静、非因非果、非生非死、非隱非現、非靈非物、非悟非迷、非修証非修果、非南非北、非凝非流、非善非悪、非定非転、非去非来、非浸非越、非超非徹、非常非滅、非虚非実、非限非遍、不変非不変、非空非非空、非相非非相、非性非非性、非質非非質等の如く対立するモノゴトではない。
- 五、「仏様」とは、無量無始の過去より、一切の世界とその万我物事象および徳力能所をして、宇宙の空間として、鳥宇宙として、太陽星辰の一個一個として、春華秋月として、昔々の猿人の一人一人として、万代万人の生死苦楽の一変一撃として、釈尊として、キリストとして、遺伝子の超微成分として、一切存在の一つ一つとして実存しながら自らの豊さを露顯し、活動しながら一個一変として成就している遍徹的な御いのちである。
- 六、「仏様」とは、一切として遍在し活現成している存養的な御命であるだけでなく、一切の過去、現在と到来の宇宙万物を常に超脱する永遠無尽で絶豊の極まりない徳力を本然性質とする御いのちでもある。この御命の活現成の一相一態でない、この御命で盈満されて

いない世界や万有変化などが一つもない。一方、過去・現在と未来の万劫千界の我物事象等は、この御命を汲み尽くせたり、空白化したりや衰弱化させたりする事がなければ、抑制したり礙げたりする事も出来ない。仏様は、一切の實在としていくらでどんなに変化流転していても、「非仏様」(無限無尽の御命でない存在)に変成する事が出来なければ、隠現界の一物一変に転顛する事も永遠に出来ない。全世界が減びても、仏様に何の害はない！七、「仏様」と過去・現在と未来の在りとあらゆる世界とその万有千化の徳力とは、「實在」として、眞実の境地として同じである。換言すれば、仏様も、太陽星月も、汝も私も、微粒子等も実存する。しかし、同時に、生命を「仏様」としてあらしめる本然徳力の範位・性格と、生命体を「流星群」、「太陽」、「山河草木」や「人体免疫」としてあらしめる本来徳力とその範位とは、根本的に異なる。仏様を決定づける徳力の位量と万劫千界等を決定づける徳力の位量は、古今未来に互って、交代する事が出来なければ、取り換えや容れ換えをする事も出来ないし、生仏の役割交換も不可能である。これらの事実は、生仏の本然自内性(の徳力)における永遠の相違を裏付けるものである。

仏様と宇宙万有を結ぶ根本徳力の内容と生仏両界の違いを決定する根本徳力とその位量の現実性を正しく把握し、少しでも理解する事は、万世千界の我物、取り分け、人間にとって、その人甕の禍福道を歩む上においても、その真福を成就する上においても、測り知れない意義を有するものである。我々の現存在、その展望と未来を決定づける根本的な真理、特に我々の究極の慈親である仏様とその御心についての「無知による迷いは永遠の損失である」と道元は『恁麼』巻の中で述べている通りである。さらに、『仏性は、活動するかしないのか、我々もその活現に気付くか気付かないのかによって仏性の実存が成り立つ又は成り立たないのではない。又、我々は仏性を認識するかしないのかによって仏性は神妙神明であったりなかったりするのでもない。そして、我々は知っているか知らないのかによって、仏性が本然の自内性を有する又は有しないのでもない』<sup>(38)</sup>と道元は「仏性」巻の終りに明示する。

以下、全仏国土、全仏海や大仏命界とも呼ばれる生仏海の心である仏様のみが本有する根本徳力(自内界の特有性)として、次のような能所があげられる<sup>(39)</sup>。

- 一、仏心界の無始無終で不転顛の無常性、
- 一、仏心界の無定相的で無限無尽の自内性(無定性、「無自性」や「無性」とも言う)、
- 一、仏心界の永遠不依で絶対的な自由自在性、
- 一、仏心界の無碍無辺際で隠顯的な活現成(仏行)とその栄光、
- 一、仏心界の無生無漏(煩惱執着)で無辺際の悟智、
- 一、仏心界の(の本然性質)の永遠の不可解不可得性。

仏様の本然実質である生命の徳力能所と、仏様の本然自内性である生命の徳力能所の絶妙極まりのない無相の無尽蔵(無限性)とは、一瞬一寸の隔りなく何の混じり気もない単一で生一本の生命徳力海である。言い換えれば、仏様の本然実質とその無限自性とは100%で同一同体の生命海である。先程列挙した徳力の各々が、別個の我物でなければ遍ねく総てを覆蓋するものでもなく、附帯的な属性でなければ偶然(一切因縁)の特徴でもなく、ある時点で発生し進化した仏命界の特色でなければ万我

物事象の万変千化等の活動の結果でもない。それらの徳力は、仏性（仏心）のみに認められる無生無辺際の徳力能所海の根本的な様態であり、仏様の実存とその活現成の根本様態である。

仏様（仏心界）の第一の根本徳力として、無始無終の不転顛性と無常性が上げられる。在りとあらゆる世界とその万我物事象の万変千化を泌徹（心臓の如く全人体の隅々までで血液を滲み通らせ生か）し、透脱（何の事物変化にも妨害されずに全てを完全に通り抜ける）しながら超越する心（念の漂動）は、生まれた事がなければ、生みの親や育ての親もなく、兄妹もいなければ配偶者もない。始めがなく実存するものは終わりもなければ絶滅もないのは自明の理である。仏様は『無常』であるとは、実存の継続がなければ、一瞬で全面全体の隅々まで100%で変成したり、一瞬で偶然に発育し、次の瞬間で何も残らず徳力の全体が絶無（100%のゼロ）に転じたりする事もない。ここで言う「無常」とは、仏心が自らの生命活動を一瞬一寸で底止したり停滞したりすることもなく、永遠の過去、現在の一瞬一寸と未来永劫に互って生々と実存し、自由自在に活現成する事である。そして、仏様の「不転顛性」とは、仏様がいくら隠顯的に活現成していても、顯在の全面において不活緩慢（活動が100%全減していること）の状態に住じていても、非仏心（一個一変の実有）に変成したり、虚実や妄想に転じたりする事がなければ、絶無に転顛する事も永遠にないのである。

次に、無限無窮の無定相性とも称せられる無自性（無限自内性）が仏様の根本的な特異性の一つとして見なされている。ここで言う『無自性』とは、在りとあらゆる現象界で見られる執着とその繫縛の一切を断ち切った我（無我心）や万我物事象とその万変千化が本有する固定した個性のようなモノでなければ、御命を、日月星辰・人間や動植物等として現定するものでもない。又仏性を『仏性』、唯一心を『唯一心』としてあらしめる徳力とその活現の100%の欠如——すなわち「絶無界」でもない。さらに、この「無自性」とは、矛盾を孕んでいる同時虚実界でなければ、現（真）実に全く根拠のない虚構的な概念や妄想でもなく、無間断で全面的な万変流転による仏性の100%の転顛でなければ、非仏性・非生命や非超徹的な存在への変成でもない。この「無（限）自性」とは、仏様の御命の永遠で遍満的・浸徹的・透脱的および卓越的な実存とその活現の無限無界で絶妙の極まりない妙態（様態）である。換言すれば、この『無限自内性』とは、在りとあらゆる劫界とその万我物事象等の一個一態として活現成しながら、永遠に互り、それらに全く引掛からない、全然抑制も限定もされない仏様の御命とその徳力の無比で絶美の極まりない性格である。要するに、万世千界の心である仏様は、一切の「格」に制限されない、一切の「量範」に限定されない、一切の「相」に束縛されない、一切の「位格」等を絶する徳力を本有する御いのちである。仏様のこの特異性を『無限自内性』〔無自性〕と呼ぶ。

次に、永遠で絶対的な不依性と自由自在性が仏様のみの根本徳力として数えられている。ここで言う「不依自立性」とは、仏様は、永劫に互り宇宙万物から全面的に隔絶した妙界であり、又は、一切劫界とその万我物事象からいつ切り離れても、単独で実存出来る大我の如き世界であるという意味ではない。さらに、この「不依自立性」とは、仏様の実存・無辺際の妙態とその隠顯的な活動自体が、万世千界・その万我物事象やその動静の諸様態に依存するモノゴトでなければ、宇宙万有やその万変千化によって発生し養成されている宇宙的な附属我・附帯物や附着象のようなものでもない。ここで説かれている「不依自由」とは、一切世界等の唯一無比の心である仏様の永存とその活現成を一瞬一寸でも妨害したり洩いだり、又は、汚染したり閉塞したりするものごとがなければ、仏様の自発的で超徹的な活現成を制限したり掩い蓋したり、又は、中断中絶したりし得る物事がいないという事である。次に、ここで説示されている「自由自在性」とは、仏様の全活現成が全く因縁のない100%の偶然によるものであったり、支離滅裂・滅茶苦茶で秩序の全くない活動や顯現でなければ、荒唐無稽で



永遠普遍の因果縁起法を無視したり、その秩序経歴もとに悖ったりする勝手気ままや私利私欲の無責任の活現であるという意味ではない。ここで主張されている「永遠の不依自立性」と「絶対的な自由自在」とは、一切存在の匹儔なき心である仏様の実存とその活現成の事由は、万世千界とその我物事象の諸感覺悟知の理解と検証の範囲を遙かに越えているので100%で把える事が不可能であるが、仏様は、宇宙万有に依存せず、悪影響を全く蒙らず、無始の過去から無尽の来劫を通じて、自己自内性の至聖みむね秘法を絶え間なく自由を実現するという意味である。

次に、無限で隠顯的な活現成（仏行）とその光明が仏様の根本徳力として捉えられている。一切世界とその万有千化をして活現成すると同時にそれらを絶え間なく超脱している仏心〔全現実の本末心〕の大成を前章（「仏と三世千界の道を詮く」）の中で既に詳しく説示したのでここで省略する。仏様の諸活現成は、仏性自体にも万我物事象界にも微々たる傷疵きずの影でさえ与えなければ、永劫の未来を通じて、仏性の無尽秘蔵界を具現し尽す事も出来ない。このような生仏の大成こそは、仏命海の全面全相、取り分け、仏性の無尽宝蔵界の裕福豊大・無償で無限の慈愛と無比の栄光を覗かせるものである。道元禅師の言葉をやや敷衍して言うと、人間の生死も、知不知も、信不信も、迷信も悟信も、社会的な善悪も、天界・修羅・動植物界・餓鬼や地獄も、流転変化も…一切は、在りのままで、仏様の世界を詮き、その栄光を語る一響一閃せんである。

次に、無生無漏で無辺際の悟知が仏様のみの根本徳力の一つとして上げられる。ここで説く「仏智」とは、一切現象界の感知的、直観的又は推理的な知識や智恵ではなく、仏様の活現成の遍徹的、不偏で無媒介の通徹知である。この仏智を碍げたり、蔽掩へいえんしたりする障害物がなければ、その智の無間断で通総通徹的な深まりには限界が認められない。さらに、この仏智は、自ずからの源泉である仏海の一切心を初め、その現身である一切世界をも隅々まで常に通徹しながら極め尽くしていると同時に無窮無涯のの闡きがある。しかし実のところは、仏智の機能自体が人間の知能を超え、人間にとって永遠に不可解の境地である。

そして、仏様の本然性質、取り分け、その自内性のの絶妙極まりのない宝蔵界が、人間だけではなく、一切の有限界にとって永遠に不可解で不可得の境地である。先ずここで言う「不可解性」とは、人知を初め、一切の有限知での把握が困難であり、ものごとの100%の理解・通徹は不可能という事である。しかし、道元は、「不可解」という表現ではなく、「不可得」や「不得」という語を用いる。「心不可得」という巻の中で『過去心不可得、現在心不可得、未来心不可得』という世尊の言葉、そして、「恁麼」の巻中に、『恁麼也不得、不恁麼也不得、恁麼不恁惣不得』（即ち、「有仏性也不得、無仏性也不得、無常仏性也不得」）という無際大師の語句を引用し、仏様（仏性・仏心）の神秘とその不可得性を明示する。上記に加え、特に、「現成公案」・「仏性」・「光明」・「三界唯心」・「説心説性」・「十方」と「唯仏与仏」の巻を背景にして考えて見ると、禅師が教示する心（恁麼）の不可得性の意味がはっきりして来る。よって、ここで説かれる「不可得性」とは、在りとあらゆる隠顯的な現象界、又は、どの我物事象であろうとも、一切の絶対心たる仏様の本然自内性の在りのまます過劫こうにおいても、現劫においても、到来永劫においても100%で理解したり、隅々まで体験したりする事が（出来）なければ、仏心自体を我がものにしたり、仏心に転じたりや仏心に100%で成り切ったりする事も（出来）ないという事である。言い換えれば、水も空気も、海い豚も雀も、恐竜も帝王も、月下美人も散る紅葉も、全ては無生で無限の心である仏様の一現として実存し、余す時所ところなく仏命に満ちている。しかし、同時に、仏様自体〔全眞実の本末心〕やその全界全相は、宇宙万物にとって永遠の謎であり、無極の神秘界である。学問もいつまでも、この神秘の前でお手上げである。それは、仏様の永遠無尽の不可

解性であり、不可得性であり、不得性である。仏様に替わって、万世千界を生じたり、通徹通総したり、養濡したりする事が出来る有限物があり得ないのも自明の理である。要するに、仏様自体と宇宙万有の一切は、実存の本質において単一生一本の仏命海を成すと同時に実存の本性（とその徳力能所）において永遠に異なる（生仏は異性同質的である）。よって、仏性は一個一変に転ずる事がなければ、我物事象も、仏性自体に変成する事が永遠にない。仏性は、自らの本然之性において、永遠に不可得である<sup>(40)</sup>。

(続く)

### 註

- (1) マザー・テレサ, 『生命の尊さを語る』, 中央出版社, <sup>3</sup>1985 (同年), pp.15, 17, 47.
- (2) 渡辺義雄編, 『立体哲学』, 朝日出版社, <sup>6</sup>1976 (’73), pp.233-238 [船橋弘氏の執筆].
- (3) 『神道聖典』, 仏経伝道協会, <sup>2</sup>1983 (同年), pp.49, 98.
- (4) Ibid., pp.78-82.
- (5) 『アルファ・大世界百科事典』, 日本メール・オーダー社, 1971, vol.9, pp.3074, vol.11, pp.4038-4039.
- (6) 『仏経聖典』, 山口益 (代表), 平楽寺書店, <sup>3</sup>1974 (同年), pp. [涅槃経] 991-992, 1123-1125, [阿含典] 189-191, 93-94, 270-271.
- (7) 『聖書』(旧約編と新訳編), バルバロ・フェデリコ (訳), 講談社, <sup>2</sup>1981 (’80), 旧約編, pp.5-6, 新訳編, pp.139, 125, 79.
- (8) 「堯」という字を内山興正の『現成公案を味わう』(拍樹社, 1987, pp.114-122) という著作の中で初めて見掛けた。著者によると、この字の作者、浄土真宗の住職・今川透さんが、癌の宣告を受けて入院加療中に「生と死」について真剣に考えた時に自分がおかれていた状態を表現するために思いついた字であるそうです。曹洞宗の学僧である内山興正は、この字が示している人間の現実を「生死二つに分かれる以前の無相のいのち」と理解したのである。小生はこの字(堯)を『セイ』と読みたい。現に、『人の命』・『人のいきる事』を「人生」と書くことになっているが、この熟語は、『人の命』や『人のいきる事』の根本と同時に自然で必然的な一面である『死』の現実を無視(見落と)している。その結果として、人間についてだけではなく、宇宙万有の自然で必然的な有り様についても、人生や動植物等の実在性には「死という側面・事実がない」という錯覚と勘違いを(視覚から始め理念に至るまで)起こし、『死のない人生』という誤った中身を概念化し、そのまま固定化するのである。現代の拒神拒仏論者や勝手気まま自己中心主義者は死の現実を「気の毒」や「人命の消滅」と観るので、死について、一切の念を排他し、末梢したいのである。しかし、死の現実を否認しても、一切の物体を始め、動植物、人間、地球、太陽系、銀河系や宇宙の諸成分が生まれ(始まり)、生きて(活動して)いる、そして自然で必然的に死ぬ(終末を迎える)という事は天然で自然の道理である。さらに、万我物事象と同じ様に人間も、一瞬一寸に「生きながらにして死んで行く」(生命力の増大にその減少が伴う)又は、「死にながら生きて行く」存在であるとも言える。言い換えれば、人間の「命」の「生きている」という実態は同時同所において自然で必然的に「死に進む」という実態に裏打ちされているのである。この現象界において、「死なないで生きる」存在が一つもなく、「生まれずに死んで行く」ものも一つもない。人間の「死」の事柄を教育においても、社会福祉の政策においても避けて通れるものではない。却って、死の自覚やその言及を避ける風習は無責任であり、相手と社会を騙すことであり、非現実的な錯覚を培う誤った態度である。小生は、Memento mori (死を自覚せよ! 死を忘れるな!) というヒンズー教、仏教やキリスト教の聖哲の語(心構え)を重視し、『人堯』と書き、「じんせい」と読むことにする。勿論、「パンダ堯」もあれば「太陽堯」もあり、「マザー・テレサの人堯」もあれば、「昭和帝王」や「ヒトラー」の人堯もある。
- (9) 山田昌, 『トマス・アキナス』, 中央公論社, <sup>2</sup>1982 (’81), pp.7.
- (10) 一例として次の聖哲は同じ立場を主張する。(a) 仏経系~竜樹, 達磨, 慧能, 空海, 親鸞, 日蓮等。(b) キリスト教系~使徒パウロ, アウグスティヌス, アンゼラムス, ボナヴェンツァーラ, デカルト, バスカル等。(c) 道儒学系~老子, 荘子, 孔子, 孟子, 朱子等。(d) ヒンズー教系~バダラーヤナ, バスカラ, ラーマヌジャ, マドゥア, ラーマークリシナ等。
- (11) 『正法眼蔵』, (中村宗一訳), 誠信書房, <sup>18</sup>1990 (’71), vol.1, 「仏性巻」, pp.16-67. 中村宗一他, 『正法眼蔵全巻要解』, 誠信書房, <sup>3</sup>1987 (’79, pp.1-6, 12-21, 32-44, 114-116, 126-132, 218-222, 265-269, 346-348. 高橋直道, 『仏性とは何か』, 法蔵館, <sup>2</sup>1990 (’85), pp.216-228. 岡田宣法, 『正法眼蔵思想大系』, 法政大学出版局, <sup>2</sup>1964 (’56), vol.2, pp.142-331. 西有穆山, 『正法眼蔵啓迪』, 大法輪閣, <sup>14</sup>1990 (’65), 中篇, pp.175-324. 内山興正, ut supra. 上記の著作を参考にした私訳である。
- (12) 『正法眼蔵』, (中村宗一訳), ibid., vol.2, 「三界唯心」巻, pp.245-248. 中村宗一他, ibid., pp.218-228. 高崎直道, ut supra. 内山高正, ut supra (全書). 常盤大定, 『佛性の研究』, 国書刊行会, <sup>4</sup>1988 (’73), pp.234-240, 251-277, 351-477. 日本仏教学会編, 『仏陀観』, 平楽寺書店, 1988, pp.67-78, 172-183, 393-408. これらの書物を背景とした私訳。
- (13) これより, [ ] という括弧内の言葉は私訳である。
- (14) この「諸法実相」巻を注意して瞑想むと「唯一心」・「一切の本末心」(御命)には、「相」や「性」が全く、100%ないのではなく、一切の現象界に見られる「固定的相」や「固定的性」, 「堅凝的相」や「堅凝的性」, 「有限の性質」や「有限の形相」の如きものは無いという意味である。しかし、後文にも見られるように、唯一心は、「無量無辺際的な相」, 「無限無碍の本性」, 「永遠無尽の力量」を本有する御生命である。唯一心の性・相・質・力等は人間等の存在の表現力を永遠に絶するので、この「性」や「相」を「無限相」・「無定の性」と称する。
- (15) ここの前後の文で道元は、絶対的な御命である「仏」とその活現成である万我物事象が、その存在徳力の本然自性において異

なり、本然実質において同等であると解く。この真諦は「生仏（万有と仏）は本来に異性で同質的な世界」である事を是認すると私は思う。

- (16) 『正法眼蔵』, (中村宗一訳), *ibid.*, vol.2, 「諸法実相」巻, pp.269-274, 282-283 (訳文)。
- (17) *Ibid.*, vol.3, 「十方」巻, pp.54-62。
- (18) *Ibid.*, vol.1, 「谿声山色」巻, pp.438-439。
- (19) *Ibid.*, vol.1, 「現成公案」巻, pp.5。
- (20) 前にも言及したが、この眼は、カラオケボックスやキャバクラで得る事が出来なければ、皇居、国会議事堂、White Houseで見付ける事もなく、野球場、競馬場やサッカー・スタジアムで勝ち取るものでなければ、財富と金儲けに身を任せ、私利私欲の追求に専心専念する Bill Gates のような者の所に携帯電話をかけて注文できるものでもなく、「宗教法人」の面目で商売し、名利権力を追求する寺院・神社や教会などの所で会得するものでもない。世尊、ナーガールジュナ、空海、親鸞、道元等によると、終生誠実な見仏慈人、身心学道と身心脱落によってのみ得られる眼である。キリスト、使徒パウロ、アウグスティヌス、トマス・アクィナスやマザー・テレサ等によると、終生誠意の愛神愛人、利他福祉と自己反省によってのみ得られる「恵」の眼である。
- (21) 仏性、即心是仏、行仏威儀、一顆明珠、心不可得(本巻と別巻)、空華、恁麼、有時、全機、谿声山色、三界唯心、説心説法、諸法実相、無情説法、十方、遍參、如来全身、虚空、三時業(本巻と別巻)、生死、唯仏与仏と道心(仏道別本)を参照。特に、中村宗一訳他、*ibid.*, pp.12-51, 71-87, 114-116, 126-132, 218-237, 252-269, 301-315, 346-348, 424-431, 466-483。西有穆山、*ibid.*, 上巻, pp.277-566, 中巻, pp.175-324, 下巻, pp.5-50, 247-346, 453-560。岡田宣法、*ibid.*, vol.2, pp.19-470, vol.7, pp.455-478, vol.8, pp.5-40。田中昇、『正法眼蔵の哲学』, 法蔵館, 1982, pp.185-378。吉田寿一、『正法眼蔵講釈』, 中山書房/仏書林, 1986-91, 上巻, pp.5-238, 下巻, pp.307-398, 545-588, 第4巻, pp.5-30, 213-254。西嶋和夫、『正法眼蔵提唱録』, 金沢文庫, 1982, vol.1, pp.107-284。岸沢惟安、『正法眼蔵全講』, 大法輪閣, 1988('74), vol.2, pp.163-174, vol.8, pp.223-706, vol.17, pp.9-40, vol.19, pp.561-650。Abe A. M., *A STUDY OF DOGEN*, NYU, 1992, PP.33-220。Murti T. R. V., *THE CENTRAL PHILOSOPHY OF BUDDHISM*, Unvin Publ., 21987('55), pp.228-255, 276-292。Kloetzli W. R., *BUDDHIST COSMOLOGY*, Motilal Banarsidas, 1989('83), pp.51-132。上記を中心に独自の解釈を試みた。
- (22) 「自由自在」の活現とは、支離滅裂、滅茶苦茶で秩序の全くない行動や因果縁起法を無視し、それに倅る活現ではない。人間全知とその検証の世界を越える事由や道理に因る活動とその成果である。「偶然」とは、因縁の全くない、100%の存在的なゼロから発生した結果がココにあるのではなく、予期しない、思いがけない、予測不可能又は、人知が把握する「因果法」の範囲で説明や理解の不可能な出来事を言う。発生や生滅変化等の理由・因が全くないという意味ではない。因縁・理由のない存在や出来事が一つもない!!!
- (23) 道元禪師は自分の宗教を「禪宗」と呼ばず、「曹洞宗」とも呼ばなかった。強いて言えば、自分の仏教を「仏心宗」と呼ぶのを好んだそうです。
- (24) 要するに、例えば、私・私の思考・この思考によって出された結論を取り上げてみよう。「私」・「私の思考」と「その思考の結論」は繋がっているが、同一物でなければ、同等でもなく、自然で必然的に永遠に異なっているのである。「私」は「私の思考」や「その思考の結論」に永遠に変成する事が出来ないし、「私の思考」も「その思考の結論」に転ずる事もない。私を「私」せしめるモノ(本性、本然の性格・位格)、私の思考を「思考」と決定するモノ(思考の本性、思考性)は永遠無窮に違う。私を「私」せしめるモノは、永遠に「私の思考の結論」に転ずる事が無い。しかし、私は「存在する」という事、私の思考も「実存する」という事実、そして、私の思考の結論も「実存する」という事実を観ると、三つとも、実存する事実として(「実存自体」の面において)同等であり、私の実在に根をおろし、その実存に依存している。
- (25) 例として、「私」、「私の愛情」と「愛する相手」という事を分析してみよう。私の愛情が私全体を絶対に100%で現わし尽せない。私は、愛情の機き以外に多数の機きを有し、先月の愛情の表現で私の愛情が尽きた事がなければ、相手をもう愛してなくても、私の愛情が蓄積することもなく、相手の愛情もそれで尽きる(絶滅する)事もない。私の愛情の故に愛する相手に会ったとしても、私全体を100%で現わすことがなければ、相手の愛情も100%で現れた事もない。明日…明後日また会うかも知れない!!!
- ☞クローニング(cloning)について。アインシュタインのクローンに成功しても、そのクローンは、十九世紀にドイツで生まれ、米国で活動研究し、原子爆弾の製造に貢献したアインシュタイン本人であろうか? 「私はあるアインシュタインだ!」と言っても、クローンのアインシュタインは、本人のアインシュタインの子どもからの思い出や認識に通じるのではない。クローンとは、「人我」・「人魂」(や動物等の本然自性)の復原でなければ、その再生や復活でもなく、遺伝的な身体中身の類似物の新作である。クローンの「自我」とその「自己意識」は「原我」と全く別のものである。
- (26) 従って、老子の「道」も、孔子の「無極の太極」も、世尊が明解しなかった「仏」(絶対真実)も、キリストの「父」も、空海の「大日如来」も、道元の「仏性」・「無仏性」・「無常仏性」も、親鸞の「無量無碍光如来」も、ラーマヌジャの「梵」も、トマスの「神様」も、イスラム教の「アッラー」も、マザー・テレサの「神」も同様である。
- (27) ここに言う「仏命界から離れ得ない」とは、仏・宇宙や人間の真理を是認しても否認しても、仏様の実存を信じても信じなくても、仏命の活現(因果道理の一つの具現化である「善行善報」と「悪行悪報」)という道理の世界外に誰一人も、何一つの出来事も出られない、逃げられないという意味である。善い生き方をしていた者も、悪い生き方をしていた者も同じ報いを受けるということではない! この事柄を別の折に説明する。
- (28) 註(11)から(19)までを参照。
- (29) この「妙界」(大日如来、仏様、無量無碍光如来、天、天命、道理や神様の別称)の発見と承諾を妨げる様々な要因の内に、人の無知愚鈍、社会や家庭内の偏見、悪い仲間および誤った教育の他に、最大の障礙となるのは自生活の誠実な直視の恐怖、自己中心的な貪欲、怠散心(怠けて遊び回る事)と「吾れ神仏なり」(己の上に神も仏もなし、俺の私利私欲が最高の法)という

妄想群であると思う。

- (30) 『正法眼蔵』, (中村宗一訳), *ibid.*, vol.1, pp.16-76。〔 〕という括弧内等は, 私の追加訳であり, ■●という印は, 私が特別に重視する語に付けたものである。
- (31) 『正法眼蔵』(中村宗一訳), *ibid.*, vol.3, pp.65-67, 82.
- (32) *Ibid.*, vol.1, pp.328, 338-339.
- (33) 岡田宣法, *ibid.*, vol.1, pp.59-61.
- (34) *Ibid.*, vol.2, pp.21-24.
- (35) 『正法眼蔵』, (中村宗一訳), *ibid.*, vol.1, pp.139.
- (36) *Ibid.*, vol.4, pp.415-433.
- (37) 出来事の未知未解の原因や因縁, そして原因の全く(100%)ない出来事(が存在不可能であり,)の意味を間違ったり, 勘違いしたりしてはならない。100%の存在的ゼロ(無因縁)から永遠に何も生じ得ない。
- (38) 『正法眼蔵』, (中村宗一訳), *ibid.*, vol.1, pp.66(仏性), 336(恚麁)。
- (39) 一切世界の唯一無比の本末心である仏様(仏心)は, 自然で顕然たる活現成を取り止める事が出来るが, 自然で自己自内の活現成(自らの生命の活動)を取り止めたり, 中断したりする事が出来ない。もし, 仏様は自らの生命活動を打ち切ったら, 生仏全界が停止し, 存在的な活動が「ゼロ」化(絶滅)する。仏様は自殺しない!
- (40) 「仏性」(唯一心, 法性, 一切世界の御命)の本然的に無限の自内性を独自に提唱するに当たり, 下記の著書を参考にした。岡田宣法, *ibid.*, vol.2, pp.19-460, vol.3, pp.265-313, vol.7, pp.269-380, vol.8, pp.315-380。西嶋和夫, 『現代語訳正法眼蔵』, 金沢文庫, \*1993('70), vol.1, pp.133-138, vol.4, pp.3-146, vol.5, pp.111-279。岸沢惟安, *ibid.*, vol.1, pp.465-604, vol.2, pp.3-32, vol.7, pp.362-385, vol.8, pp.223-704, vol.13, pp.3-490, vol.14, pp.3-408, vol.19, pp.365-468, vol.20, pp.559-618。西谷啓治, 『正法眼蔵講話』, 筑摩書房, 1987, vol.3, pp.3-19, vol.4, pp.100-122。田中昇, *ibid.*, pp.151-393。西有穆山, *ibid.*, vol.上巻, pp.425-566, 中巻, pp.5-120, 175-460, 下巻, pp.5-120, 247-388, 419-540。高崎直道, *ibid.*, pp.204-233。内山興正, 『正法眼蔵・仏性を味わう』, 拍樹社, 1987, (全書)。中村宗一他, *ibid.*, pp.12-56, 70-120, 126-132, 154-158, 218-257, 265-269, 301-315, 372-379, 469-475。常盤大定, *ibid.*, pp.234-277, 351-477。勝又俊教, 『真言の教学』, 国書刊行会, 1981, 上篇, pp.48-190, 下篇, pp.723-776, 878-999。加藤清一, 『密教の仏身観』, 春秋社, 1989, pp.1-432。Abe M. A., *ibid.*, pp.33-220。Murti T. R. V., *ibid.*, pp.228-292。Kloetzli W. R., *ibid.*, pp.51-132。